

子どもを大切にし  
子どもの力を信じ  
子ども力を引き出す

しおり

# 校内研究の葉



## 内 容

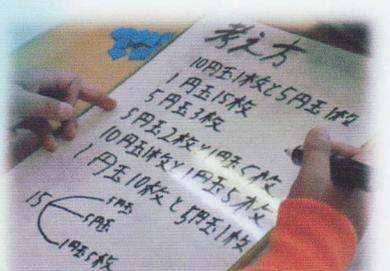
### 校内研究 編

- 1 教職員の意識と課題の共有化
- 2 研究計画の立案
- 3 研究授業の実施（提案・検証）
- 4 夏季校内研修
- 5 校外研修・研究会等の活用
- 6 日々の授業研究の取組
- 7 研究のまとめと評価



### 授業づくり 編

- |           |        |
|-----------|--------|
| 小学校 国語    | 中学校 国語 |
| 小学校 算数    | 中学校 数学 |
| 小学校 理科    | 中学校 理科 |
| 小学校 外国語活動 | 中学校 英語 |
| 小・中学校 道徳  |        |



大阪府教育センター

平成 25 年 3 月



大阪のすべての学校で授業研究の文化をはぐくむ

# 「校内研究の栞」発刊にあたって

大阪府教育センター所長 藤村 裕爾

小・中学生を対象とした全国学力・学習状況調査において、全国平均を大きく下回るという大阪の極めて深刻な「学力の課題」が明らかにされました。大阪府教育委員会では、学力向上を最重要課題として、学校の取組を支援するための予算的措置、人員配置、数々の研修会の実施、学力向上のための教材や指導資料の配布等の手立てを講じてきました。

各学校の取組が進み、徐々に、改善の傾向が見え始めてきましたが、学校調査の結果からは、朝の学習や読書、放課後の補充学習、ボランティアによる学習支援等、学力向上のための周辺の取組は進展しつつあるものの、「授業研究を伴う校内研修の実施回数」や「様々な考えを引き出したり、思考を深めたりする発問や指導」、「学校の教育目標やその達成に向けた方策について全教職員の間で共有し取組にあっている」など、学力向上の取組の「本筋」であるべき、学校をあげての授業そのものへの改善の取組が進んでいないという実態が明らかになってきました。

大阪府教育センターでは、こうした課題の解決にむけ、平成 22～24 年度の 3 年間、小・中学校を対象に、各学校が校内研究を活性化させて授業改善を行い、学力向上を図ることを目的として、「パッケージ研修支援」に取り組んできました。また、こうした取組を踏まえて、パッケージ研修支援や様々な研修で発信してきた「授業づくり」について「大阪の授業スタンダード」としてまとめ、各学校での授業改善の推進を図りました。

さらに、平成 24 年度から、「大阪の授業スタンダード」を具現化するため、「校内研究支援プロジェクト 地区別・校種・教科領域別 授業改善ワーキング」を三島、北河内、中河内・南河内、泉北・泉南の 4 地区で開始しました。これは、各校がより自立して校内研究を進めていくため、校内研究の核となる人材を育成するとともに、指導主事の指導助言等に関する力を府と市町村とが協力して高めていくことを目的としております。平成 24 年度は小中学校 220 校から 302 名の先生方が参加し、ワーキング会議を府内 4 地区で年間 6 回開催してきました。ワーキング・スタッフには、全市町村教育委員会から合計 82 名の指導主事に参加いただき、スタッフ会議とワーキングの実施にご協力をいただきました。



この「校内研究の栞」は、平成 24 年度のワーキングの資料として作成したものを中心に、小・中・高等学校の取組事例を入れてまとめました。

なぜ校内研究が必要なのか、どのような方法があるのか、また、教科別の授業づくりについてを解説しています。この冊子を活用いただき、各校の校内研究が活発になり、より授業改善が進むことを願っています。

平成 25 年 3 月

# 校内研究 編

「校内研究 編」は、平成 24 年度に実施した「校内研究支援プロジェクト 地区別・校種・教科領域別 授業改善ワーキング」のうち、主に「校内研究ワーキング」において、提示した資料を中心にまとめたものです。

また、小・中・高等学校のパッケージ研修支援やワーキングにおいて提供いただいた学校における取組事例をいくつか掲載しています。

「1. 教職員の意識と課題の共有化」から「7. 研究のまとめと評価」は、1年間の校内研究の流れをイメージして構成してあります。それぞれの学校の実態に合わせて、年間の校内研究の取組に取り入れてください。

# 1

## 教職員の意識と課題の共有化

### 校内研究の必要性と課題意識の共有化

## 1. 校内研究の必要性

「授業を変える、子どもを変える」。これは、平成23年3月に大阪府教育センターで出したDVD「確かな学力をはぐくむ 3」で示した副題です。今、日々の授業を変えることで子どもたちが変わっていくということが府内の学校でも見られます。こういった学校では、すべての教員が共通する課題に対して一致して取り組み、少しずつ子どもの変容を遂げてきたのです。その核となるのが授業改善の校内研究です。

### (1) 教員にとっての研修・研究の意義

教員には法令により、絶えず研究と修養に努めることが義務付けられています。また、様々な教育課題への対応や社会の急速な進展の中での知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから「学び続ける教員像」が求められています。

#### ◆教育公務員特例法

第21条 教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。

#### ◆これからの教員に求められる資質能力

中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」より

- これからの社会で求められる人材像を踏まえた教育の展開、学校現場の諸課題への対応を図るためには、社会からの尊厳・信頼を受ける教員、思考力・判断力・表現力等を育成する実践的指導力を有する教員、困難な課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する教員が必要である。
- また、教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である（「学び続ける教員像」の確立）。

#### ア めざすべき授業の構築に向けて

学習指導要領では、確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、そのバランスを重視する必要があるとされています。

こういった双方の力をバランスよくはぐくむ授業<sup>※</sup>を構築していくためには、多様な方法で研鑽を積み、様々な授業づくりのアイデアを増やす必要があります。また、それぞれの学校の状況や子どもたちの実態に合わせた授業のあり方については学校全体で方向性を定めて取り組んでいくことが大切です。そのためにも校内研究が重要となるのです。

※ 具体的な授業づくりについては大阪府教育センターWebページに掲載している「大阪の授業STANDARD」を参照してください。



## イ 授業を通して学び合う教職員集団をつくる

子どもの実態を的確につかみ、思考力・判断力・表現力等をはぐくむような子ども主体の授業を充実させるためのアイデアは、数多くの授業を見ることを通してふくらみます。それは校内において実施される同僚による提案授業という形の研究授業であったり、互いに授業を参観して意見交換をするようなシステムであったりするでしょう。

特に教員の代表による研究授業のあとの討議会において、特定のポイントに絞って討議を行うということは、同僚との対話を促進する絶好の機会と言えます。このような機会を利用することで、授業づくりの上での意見や情報の交換だけでなく、直面している課題認識の共有にもつながり、「学校力」の向上も期待できます。

## ウ 自らの授業・指導のあり方を振り返る

教員として、まとまりをもった知識や技能を学び習得することは大切なことですが、それがすべての場合に効果があるとは限りません。特に冒頭で述べたような様々な課題や常に変化する学校環境に対応するためには、指導方法等を子どもに応じてどのように変化させ、新たにどう開発していくかということが求められます。校内研修等の機会を活用して自らの授業や指導のあり方を振り返り、常に研究していくことが大変重要です。

このように自らの実践を振り返り、研究していくという「探究心」は授業研究だけではなく、生徒指導や学級経営など教員の職務のすべての領域で発揮される実践の原動力になります。

## (2) 校内研究を充実させるポイント

校内研究をより効果的に取り組み、充実させるために、次のような流れが考えられます。

- ① 学校教育目標を教職員全員で再確認します。
- ② 実態把握を行い（根拠となるデータ収集）取り組むべき内容を焦点化して研究主題を設定します。
- ③ 日々の取組（授業）に反映させます。
- ④ 一定の時期を経て、取組の成果を検証します（研究授業・研究討議会）。
- ⑤ 検証においては、実態把握で収集したデータがどう変化したかを見ることで子どもの変容を確認します。
- ⑥ 成果と課題を教職員全員で確認して、取組内容を修正しながら次につなげていきます。

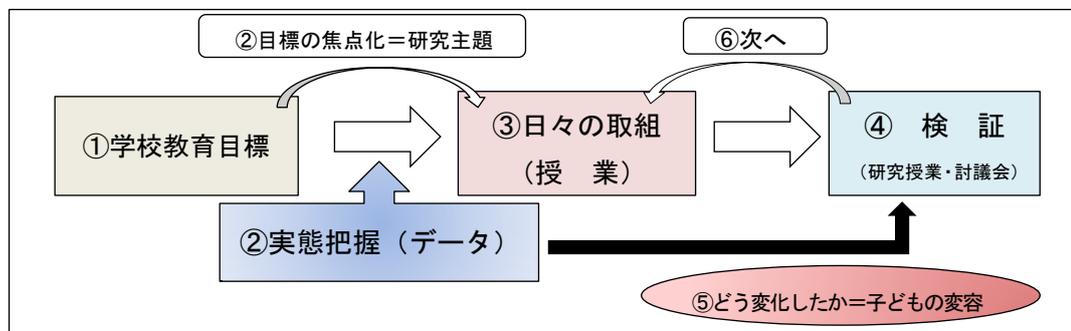


図1-1 校内研究のイメージ

このように、繰り返し、子どもの変容を中心に効果・成果検証をしながら、日々の授業をよりよくしていくことが、校内研究を充実させるポイントです。

## 2. 教職員の意識と課題の共有化にむけて

### (1) 研究組織（研究推進委員会）と教職員全体の往復

研究主題や研究仮説などを決定する際、効率的に議論が進むように研究推進委員会などの研究組織で原案を作成します。そしてそれを教職員全体に諮り、意見集約して委員会で整理し再び全体にフィードバックすることを繰り返すことで、決定の過程に教職員全ての意思を反映できるようにします。

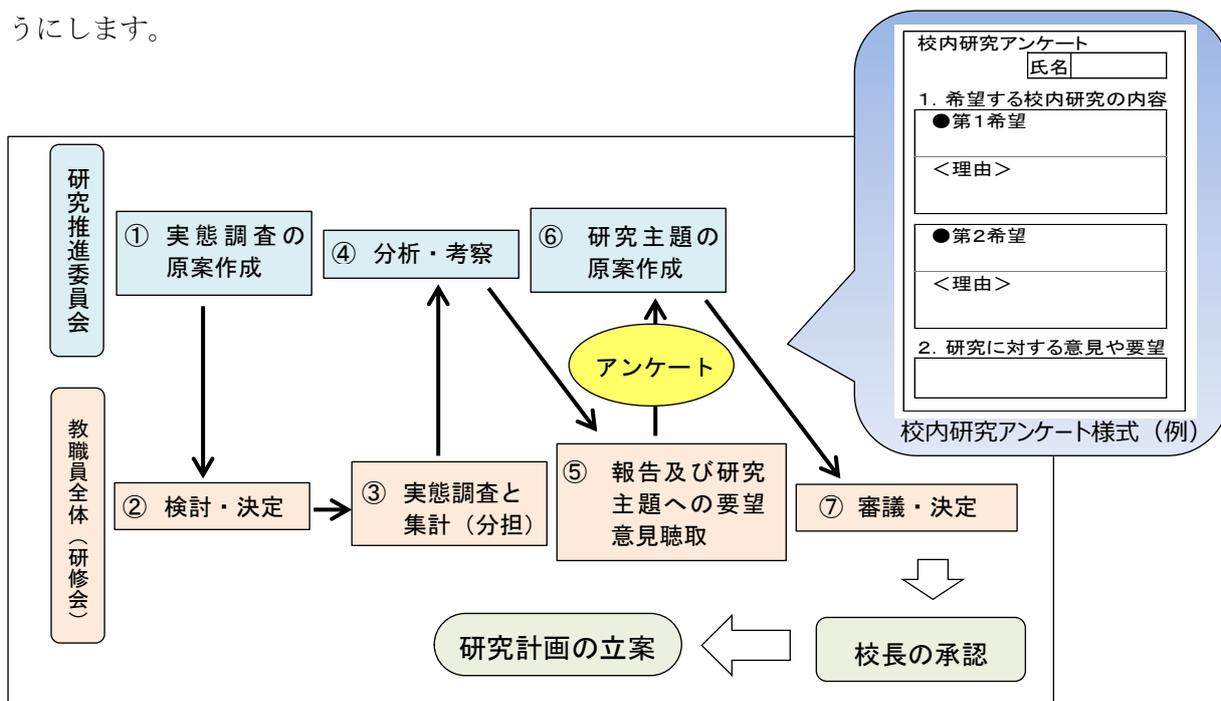


図1-2 実態調査から研究主題設定まで

#### ア 児童生徒の実態把握

まず、児童生徒の実態を教職員全体で共有化し、どこに焦点をあてて取り組んでいくのかをしぼっていく必要があります。そのために必要な調査については、研究推進委員会で調査の原案を作成し、全体研究会などで検討・決定します。調査とデータ等の集計といった作業は教職員全体で分担して行います。

集計したデータの分析・考察を推進委員会でいき、結果を全体研修会に報告し、研究主題決定に向け、アンケート調査を行い教職員全体の意見を集約します。

実態調査を行って、児童生徒の学習上、生徒指導上の課題などが多く出てきた場合は優先順位を付けて2～3項目にしぼりこみます。その際に優先すべきことは、すぐにできること、すぐにしなければならないことです。

#### 実態調査（例）

- ◆ 学力・学習状況調査
  - ◇ 設問に注目
  - ◇ 解答類型に注目
  - ◇ 質問紙調査 など
- ◆ 子どもの意識
  - ◇ 自尊感情
  - ◇ 学習への意識
  - ◇ 学校・集団への意識 など
- ◆ 子どもの学習状況
  - ◇ 行動観察…授業において、学校生活全般において
  - ◇ 作品、プリント、ノート…ポートフォリオ など

## イ 研究主題の設定

児童生徒の実態を把握して、課題を共有できたら、その克服のため、どのような授業づくりをめざすのかを決定します。これが研究主題（テーマ）となります。図1-2で示したとおり、集約したアンケートをもとに研究推進委員会で研究主題の原案を作成します。その原案を教職員全体に報告し、検討のうえ決定します。

- 研究主題の表現について  
できるだけ具体的で、すべての教職員が同じイメージを持てるようにすることが大切です。

### 研究主題に含めるべき要素

- ◆ 研究のめざす姿…「～をめざす」「～を育てる」等
- ◆ 研究の対象領域・分野…「～における」「～の研究」等
- ◆ 研究の方法（てだて）…「～をととして」「～による」等

## ウ 研究仮説の設定

たとえば「子どもの思考力をはぐくむ授業の研究」という研究主題を設定したとします。どうすれば「思考力がはぐくまれる」のでしょうか。その具体的な工夫が研究仮説です。つまり子どもに付けたい力を達成するための具体的な方策（めざす授業像）が研究仮説です。

### 研究仮説（授業仮説）

- において ……場、内容 等
- を○○することによって ……てだての工夫
- となるであろう。 ……ねらい、めざす子ども像

研究仮説に合わせて5項目程度の授業の観点を設定しておく、研究討議会や日常の授業づくりに役立ちます。

○○学校		
研究主題 「子どもの思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業の研究」		
研究仮説 授業の最初の段階で、明確な学習課題を提示することで、子どもに考える習慣がつき思考力がはぐくまれるだろう		
No	観 点	コメント
1	学習課題を設定する ●生徒にとって明確な課題を提示する ●興味を引く内容を提示する(絵、写真、ICTなど)	
2	発問のしかたを工夫する ●既存・既習の知識・技能と結び付けさせる ●解決に向けての見通しをもたせる	
3	教材・教具を工夫する ●課題解決に取り組みやすいようにする ●ワークシート、新聞、ICTなど	
4	発表する機会を設定する ●ペアワーク、グループワーク(班活動)などを工夫する ●プレゼンやスピーチ活動などを設定し、聞き手の生徒は評価する	
5	振り返りの時間を設定する ●本時の学習の確かめを行う ●本時で学習した内容を自分の言葉で表現する	
6	その他	

授業観点シートの例

## 取組事例 1

# 学校目標を踏まえ、 研究主題や研究仮説を 設定した系統的な校内研究

### 茨木市立西河原小学校の取組

【学校目標】	自ら学び 心豊かに たくましく生きる子どもの育成
【研究主題】	「読む力」を育み、自分の思いや考えを豊かに表現できる力をつける授業作り
【実態と実態把握の方法】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章を読むことに課題を持つ児童が多い → 各学級のパーセンテージを出し、氏名を確認。</li> <li>・読書をするのが嫌い → 現状を把握する為のアンケートを実施。</li> <li>・内容を正確に読み取る、行間を読む等が苦手 → 授業での詳細やアスタの結果から。</li> <li>・自分の思いや考えを文章化する事や、発表すること、意見の交流などが苦手な児童が多い</li> </ul>
【研究仮説】	<p>「国語科」の読む領域において、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 文章を正確にはっきりと読む力をつける（音読）</li> <li>② 文章を読んで、内容を正しく理解しながら読む（理解）</li> <li>③ 自分の思いを文章に書く力をつける（書く）</li> <li>④ 自分の思いを言葉で表現し、相手に伝える（話す）</li> <li>⑤ 本に親しみ、「読む」楽しさを知る（朗読やお話を聞く（読書）聞く）</li> </ol> <p>ことにより、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 児童は「読む力」をつけ、自分の思いを表現し伝える力を身につけ、国語科だけでなく他教科においても理解度が高まり、自信をつけることができるであろう。</li> </ul> <p>また、児童と教師、児童と児童のコミュニケーションがスムーズになり、児童の活動の幅が広がると共に、児童の自尊心や自己有用感が高まるであろう。</p>
【今年度の取り組み】	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 音読カードの内容を吟味し、低・中・高学年別の「西河原スタイルの音読カード」作成。</li> <li>② 様々な音読の仕方の紹介と学級での実践。昨年度パッケージ研修でも指導を受けた。</li> <li>③ 宿題で音読を毎日出す。保護者の協力を得る。音読カードの利用。</li> <li>④ 伝え合う力（話す・書く）を育むことについての指導を受ける。（パッケージ研修）</li> <li>⑤ 各学級での書く活動についての交流、提示。日記、三行日記、俳句作り等。</li> <li>⑥ 校内で児童の発表の機会をふやす。（委員会やクラブの発表など）</li> <li>⑦ 読書活動として、図書委員会による読み聞かせ（休み時間）、放送委員会による読み聞かせ（給食時）お母ボランティアによる読み聞かせ（月1回）高学年が低学年に読み聞かせ（月1回、読書タイムに）</li> </ol>
【研究計画】	<p>パッケージ研修・（国語） 2年生と4年生</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・6月…校内の実態と手だて、研究目標について。伝え合う力の育成についての実践例。</li> <li>・8月…授業案検討①（略案）、9月…授業案検討②（本案）</li> <li>・10月…プレ授業、研究授業、討議（2年）</li> <li>・11月…プレ授業、研究授業、討議（4年）</li> </ul>

【学校目標】を踏まえ、【研究主題】、【研究仮説】にしたがってより具体的になっています。

児童の実態を様々な方法で多角的・客観的にとらえようとしています。

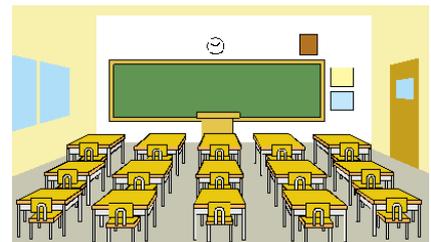
国語科の内容項目ごとにつけたい力を明確化しています。

学年別に教材等を工夫しています。

様々な表現形式で書く場面を設定しています。

国語科の授業以外でも読む機会を設定しています。

年間をとおして校内研究の計画が立案されています。



## 取組事例2

# 首席が核となり、学校全体で 授業改善に取り組む工夫

## 大阪府立野崎高等学校の取組

大阪府立野崎高等学校では、「生徒一人ひとりの学習意欲を高める授業」づくりをめざし、首席が中心となって、学校全体で授業改善に取り組んでいます。全体研修会で課題把握をし、「めざす生徒像」を共有化しました。

その後、グループ協議の結果、まとめられた授業の観点（観察シート）に基づいて研究授業、協議会が実施されたのですが、教員全員が参加し、今後の授業改善に向けた討議を行うために様々な工夫が行われました。

### 1. 教員全体が参加できる日程の工夫

- ・研究授業と研究協議会を別の日程で設定しました。
- ・研究授業の様子はDVDに録画しておき、授業を参観していない教員は討議会までにDVDを視聴して、授業観察シートにコメントを記入して首席に提出しました。

◆事前授業 11月15日

◆研究授業 11月22日

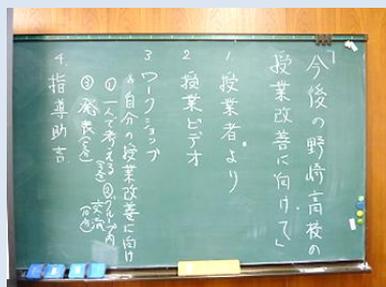


研究授業に参加できなかった教員は、授業DVDを視聴し、授業観察シートにコメントを記入して提出

◆研究協議 12月13日

### 2. 研究協議のねらいを明確化

- ・協議のねらいと手順を提示することで参加者全員が流れを共有化します。



### 3. 授業ビデオ（編集）による授業分析

- ・「授業観察シート」の中からポイントを絞り、その観点に基づいてビデオを視聴しながら首席が授業を分析して、生徒の変容を全員で確認しました。



### 4. 今後の授業改善に向けたグループ協議

- ・授業分析の内容を踏まえて、グループで授業改善のあり方を協議し、今後の方向性を共有化しました。



### 効果的・効率的な校内研究にするためのポイント

- ① 研究推進委員会と全体会の往復—全教職員の参画意識を醸成
- ② 児童生徒の実態についてのデータ化—のちの検証にいきる
- ③ 具体的な研究主題と研究仮説—日常の授業に反映

# 2

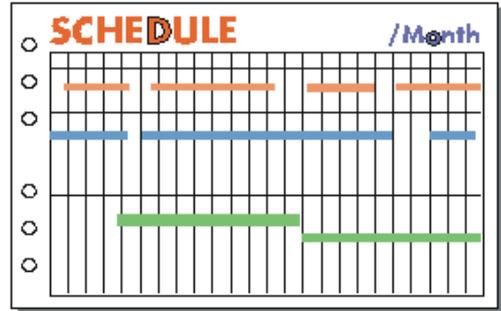
## 研究計画の立案

年間の学校教育計画に位置付ける

### 1. 学校行事とのバランスを考えた研究計画

研究主題や研究仮説が校内で確認できたら、実際に研究を進めていくうえでの計画を立案することになります。

校内研究を組織的、効果的に運営していくためには、年間の学校教育計画に位置付けられた研究計画をしっかりと立案することが大切です。また、学校では多くの行事が実施されます。そのような行事とのバランスをとることも重要です。



### 2. 取組内容と目的の明確化

年間を通じて同じようなペースで校内研究を進めていく必要はありません。あくまで他の学校行事とのバランスや研究の進捗を踏まえながら、重点的に取り組む月もあれば、そうでない月があってもよいでしょう。あくまでも学校や児童生徒の実態に合わせて計画を立案しましょう。

重要なことは、取り組んでいる内容について、なぜそれに取り組むのかという目的意識を明確にもつことです。

- 年間を通じて、次のような取組内容が考えられます（研究主題・研究仮説設定後）。
  - ・ 提案のための研究授業・研究討議会
  - ・ 夏季校内研修会（研究評価1）
  - ・ 授業公開週間
  - ・ 検証のための研究授業・研究討議会
  - ・ 研究評価2
  - ・ 研究のまとめ
  - ・ 次年度に向けての準備 など

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
校内研究年間計画立案 研究主題・仮説の設定	授業公開週間	提案のための研究授業 研究討議会		夏季校内研修会 (研究評価1)	授業公開週間	検証のための研究授業 研究討議会	検証のための研究授業 研究討議会	研究評価2	検証のための研究授業 研究討議会	研究のまとめ	次年度に向けての準備

表 2-1 校内研究1年の流れ（例）

### 3. 校内研究年間計画例

年間の学校行事と校内研究計画(例)－中学校の場合

	学校行事	校内研究計画	
		研究推進委員会	教職員全体(研修会)
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○入学式</li> <li>○始業式</li> <li>○健康診断</li> <li>○家庭訪問</li> <li>○学級懇談会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間計画案作成</li> <li>・第1回校内全体研修会企画</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回校内全体研修会 研究主題・仮説に即した研究の進め方と留意点</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○家庭訪問</li> <li>○避難訓練</li> <li>○耳鼻科検診・歯科検診</li> <li>○中間考査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究授業・討議会に向けて 研究授業の役割分担の確認 討議会のもち方</li> <li>・指導案検討</li> <li>・授業観察、分析方法を検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年会、教科部会 指導案作成、役割分担</li> <li>・第2回校内全体研修会 指導案配付・説明 授業観察・分析方法説明 役割分担確認</li> </ul>
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○進路指導委員会</li> <li>○修学旅行保護者説明会</li> <li>○林間学舎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究授業(提案授業)・討議会 データ収集・分析 ⇒ 主題・仮説は子どもの実態にあったものか 次回の研究授業に向けて</li> </ul>	
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○期末考査</li> <li>○修学旅行</li> <li>○学級懇談会</li> <li>○終業式</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・討議会の内容整理</li> <li>・夏季校内研修会企画</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第3回校内全体研修会 討議会まとめ配付・説明 夏季研に向けた準備</li> </ul>
8月		<ul style="list-style-type: none"> <li>夏季校内研修会 1学期の取組の成果と課題の整理 授業のアイデア交流会 外部講師を招聘しての講演会</li> </ul>	
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○始業式</li> <li>○3年実力テスト、1・2年宿題テスト</li> <li>○体育大会練習</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年会、教科部会 学力調査結果分析</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体育大会</li> <li>○中間考査</li> <li>○文化祭準備</li> <li>○文化祭</li> </ul>	2学期以降は、研究授業の実施回数分だけ5～6月の内容を繰り返す	
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○進路指導委員会</li> <li>○職業体験</li> <li>○進路懇談会</li> </ul>		
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○期末考査</li> <li>○期末懇談</li> <li>○終業式</li> </ul>		
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○始業式</li> <li>○3年実力テスト、1・2年宿題テスト</li> <li>○小学校との交流会</li> <li>○3年学年末考査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・効果検証の方法を検討 データ集約の内容 集約の役割分担</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年会、教科部会 検証のためのデータ収集 データ分析</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○私立高校入学者選抜</li> <li>○公立高校前期選抜</li> <li>○進路指導委員会</li> <li>○1・2年学年末考査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研究の成果と課題 原案作成</li> <li>・次年度の研究主題・仮説に 対する意見を集約 原案作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内全体研修会 校内研修の成果と課題確認</li> <li>・学年会、教科部会 次年度の研究主題・仮説に 関する意見まとめ</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1・2年学年末考査</li> <li>○卒業式予行／卒業式</li> <li>○期末懇談(1・2年)</li> <li>○公立高校後期選抜</li> <li>○修了式</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内全体研修会 次年度の研究主題・仮説の 決定(案)</li> </ul>

# 3

## 研究授業の実施（提案・検証）

指導案検討から討議会まで



### 1. 研究授業を行う目的

研究授業を行う目的はいろいろあります。初任者等教職経験年数の少ない教員にとっては、先輩教員や同僚に授業を公開することでアドバイスを受けることができ、自らの授業力の向上の機会となるでしょう。

校内研究における研究授業では、児童生徒の実態を踏まえた研究主題や仮説の確かさを授業の場面で確かめる（提案授業）ことや、一定期間取り組んできた成果を授業場面で検証する（検証授業）ということが考えられます。

### 2. 指導案検討から模擬授業・事前授業まで

#### （1）指導案検討

校内研究では、研究仮説を検証するという観点から、指導案の作成は授業者個人にまかせるのではなく、共同で作成します。その際、重要なポイントは次のとおりです。

- 学校の研究主題、研究仮説が適切に盛り込まれているか
- 子どもの課題とめざす子ども像を踏まえたものとなっているか
- 学習内容の系統性を踏まえたものとなっているか（前学年や既習事項、今後の学習内容との関連）
- 題材や目標は適切か
- 評価規準や評価方法の設定は適切か
- 指導方法は効果的か
- 目標を達成できる学習展開となっているか

#### 指導案を作成するにあたって把握しておくべき児童生徒の実態

1. これまでに学習してきた内容（既習事項）
2. 現段階で何が出来て、何が出来ないのか
3. これまでの指導を踏まえ、どのような考え方をするのか

#### （2）模擬授業（授業者以外の教員が児童生徒役）／事前授業（事前研）

共同で指導案を作成したら、その指導で本当に仮説が検証できるのか、児童生徒の学習に有効であるかを実際の授業の形態で吟味します。

模擬授業では授業者以外の教員が児童生徒役になり、実際に近い形で授業を受けます。課題の提示や教材の使用、発問、板書といった授業の進め方を子どもの立場で有効かどうかを確認



します。

事前授業は、実際の授業の中でその指導案の有効性を確認します。すべての教職員が参観するのではなく、指導案検討に深くかかわった者だけで行うことが一般的です。

## 模擬授業や事前授業で指導案を吟味する観点

- 研究仮説を検証できる授業となっているか（仮説の内容が盛り込まれているか）
- 指導の展開は児童生徒の状況にあっているか
- 時間配分は適当か
- 教材・教具は、児童生徒の自力解決を促すものであるか
- 実際に児童生徒の反応はどうだったのか
- 発問や板書は児童生徒にとって有効であったか

## 取組事例

## 授業観察シートの内容を踏まえた授業づくり 大阪府立泉鳥取高等学校の取組

大阪府立泉鳥取高等学校は「ICT の活用による『わかりやすい』授業づくり」に取り組んでいます。「めざす生徒像」を共有化したうえで「めざす授業像」とはどういったものかを協議しました。そうして作成されたのが図3-1にある「授業観察シート」です。

家庭科の調理実習における授業で、観察シートの観点に基づき、右のような工夫を試みました。

- 見えるところに常に「本時のねらい」と学習活動を明示する（シート①【写真1】）
- 授業の導入で最後に書く「まとめレポート」の内容を提示する（シート①【写真2】）
- 生徒のつまづきを予想して、イカのさばき方を解説したDVDを提示する（シート②③【写真4】）
- 活動がスムーズに進むように、各テーブルにわかりやすいレシピを置く（シート④【写真4】）

### 泉鳥取高等学校 授業観察シート

\_\_\_月\_\_\_日\_\_\_時間目 授業担当者\_\_\_\_\_ 参観者\_\_\_\_\_

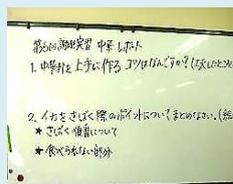
#### 目 標

- すべての生徒にとってわかりやすい授業づくり
- 学ぶ楽しさを味わわせ、やる気を引き出す授業づくり

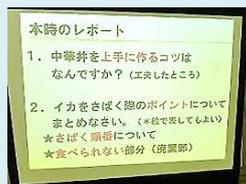
	項 目	コメント
目標の設定	①授業の導入で「本時の目標」を明確にし、何ができればよいかを生徒にしっかり理解させている。	
指導内容の適切さ	②教科書の内容を身近な内容に結び付けることで、学習内容への興味や関心を高めている。	
指導方法の適切さ	③生徒の反応を踏まえながら、わかりやすい説明がなされている。	
	④手立てを明確にして、生徒に考えさせたり発表させたりしている。（目標達成に向けたスモールステップの設定）	
	⑤生徒どうしの教え合いや学び合いの場面を設けている。	
個の学習の成立	⑥達成感を味わわせ、有能感を高めるために、生徒の発表などの活動のよさを具体的にほめて評価している。	
	⑦1時間の授業の振り返りで、生徒の一人一人が満足感を味わっている。	

図3-1 授業観察シート

### めざす授業の実現に向けた工夫



【写真1】



【写真2】



【写真3】



【写真4】

### 3. 研究授業

#### (1) 研究授業の前に ～役割分担～

研究授業を意義のあるものにし、その後の討議会を効果的なものにするためには、参観者が研究主題や仮説を検証する観点を共通理解した上で参観することが大切です。討議会で共通の観点到にしたがって、具体的な話し合いを展開するためには研究授業においてデータの収集が不可欠です。そのために前もって役割分担しておきましょう。

#### 取組事例

### 研究部通信を使って意識の共有化！

#### 大東市立深野中学校の取組

貴重な時間を使って行う研究授業。せっかくの機会をできるだけ有効に活用するため様々な工夫がされています。ここで紹介するのは研究部通信を使って教職員全体の意識を共有化する取組事例です。大東市立深野中学校では研究授業の直前に、研究部が校内の研究部通信「Ken=CUBE」(ケン=キューブ)を全教職員に配付して、事前に参観の観点とそれに続く研究討議会(協議会)のあり方を周知しています。ポイントは次のとおりです。

- ① 年間の授業づくりのテーマを再確認する
- ② プレ授業(事前授業)の予定を告知・・・出張等で研究授業を参観できない教職員向け
- ③ 研究授業参観の際の観点を事前に提示
- ④ 研究討議会(協議会)の方法と流れ、およびねらいを周知

授業の観点は同時に配付する別紙観点シートで確認

今年度の授業づくりのテーマ

「協同学習とユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」

プレ授業の予定 6月

7日(木)	2限	1-5
8日(金)	5限	1-1
11日(月)	2限	1-4
13日(水)	4限	1-3

研究協議の進め方

#### ★ワールドカフェ方式

- ① 第1のグループでテーマについて交流
- ② ①で交流したことを、第2のグループで紹介、交流
- ③ 全員が元に戻り、移動先で得たアイデアを交流
- ④ 全体で意見交換

今回の授業のねらい

- ・課題を共有
- ・相手を尊重する意識
- ・新たな視点に気づく など

大東市立深野中学校 研究部通信「Ken=CUBE」

#### (2) 研究授業において ～データの収集～

事前の役割分担にしたがって、客観的な数値データを収集します。

#### 研究授業におけるデータ収集の例

- 児童生徒の活動と指導者の活動とに分けての授業記録
- 教科の習熟の程度により、特定の児童生徒に焦点化した観察
- 教室の列ごとに複数の担当を決め、児童生徒の変容を観察
- S-T分析による児童生徒と指導者の活動の記録
- ビデオ・カメラ等視聴覚機器による映像・画像データの記録
- 授業観点シートの活用



### (3) 研究授業直後 ～データの統合～

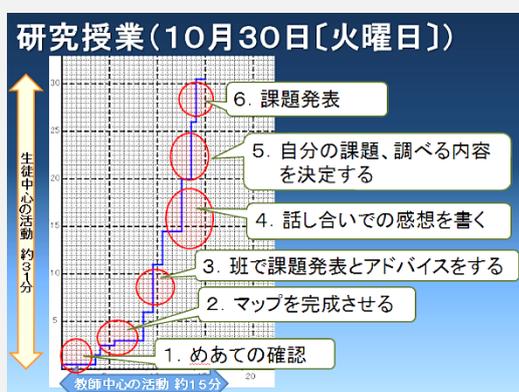
授業において収集したデータを統合することで、仮説の検証のための討議会の参考になります。たとえば、S-T分析ソフト\*で作成したグラフに授業記録から学習活動等の内容を書き込み、さらにその場面の写真をリンクして授業を立体的に再現します。事前に枠組（テンプレート）を作成しておけば、討議会までの短い時間でもスライド資料を作成することが可能です。

#### \*S-T分析ソフト

授業において、一定の時間（30秒など）毎に、児童・生徒〔S〕と教師〔T〕の行動と内容を記録し、そのデータに基づいて作成したグラフを基に、授業中の生徒と教員の行動関係がどのように現れているかを分析する方法。（分析ソフトは、下記WEBサイトから入手可能）

<http://www.osaka-c.ed.jp/kate/gakusui/gakusui-folder/ST-analysis-contents/ST-analysis-top-page.htm>

#### データの統合の例



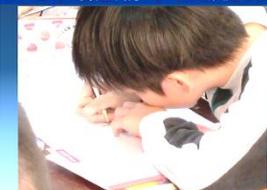
3. 班で課題発表とアドバイスを



4. 話し合いでの感想を書く



5. 自分の課題、調べる内容を決定する



6. 課題発表



それぞれの学習活動と写真がリンクしており、活動の流れにそって授業を振り返ります。

## 4. 研究討議(協議)会

### (1) 効果的な討議会

研究討議会が個人の感想会になっていませんか。授業において収集したデータをもとに多角的に成果や今後改善すべき点を話し合います。

#### 効果的な研究討議会のための留意点

- 研究主題や研究仮説を踏まえて討議する（討議の柱を示す）
- 授業の成果や課題を明確にする過程を通して、参加者の授業の質を高める工夫が必要
- 研究討議会のゴールを参加者全員で共通認識して討議会に臨む（成果と課題⇒改善策）
- グループ討議をする場合は、1グループが4～5人
- 司会進行、記録者、発表者等の役割分担（討議が活性化するように工夫する）
- 最後に討議で学んだことを各自の授業にどのように生かすか、発表したり、書いたりする
- 取り上げることができなかった事項は、「いつ」「どのような方法」で討議していくのかを明確に

## (2) 討議会の進行

研究授業のあとの討議会では、討議の柱を明確にして、授業で収集したデータや児童生徒の様子を踏まえて、成果と課題をまとめるとともに、課題の改善の方向性を明確にします。

### 取組事例

## ファシリテーター\*の機能を取り入れた協議会 和泉市立北松尾小学校の取組

#### \*ファシリテーター

会議や話し合いの場で中立の立場を保ちながら、発言や参加を促したり、話の流れを整理したりして、参加者の認識の一致を確認したりする。合意形成や相互理解に向けて深い議論をし、実行に向けたモチベーションを高める役目を担う。

#### 1 協議会開会【ファシリテーターからの説明と確認】

- ・協議会の進行計画について
- ・グループ討議の方法について

#### 2 研究授業について【授業提案学年からの説明】(5分程度)

- ・学習研修部としてのねらい
- ・本時の授業としてのねらい 《教材観および指導の重点についての説明》
- ・子どもの様子 《主に学年児童の実態》

#### 3 グループ協議【授業参観学年内での討議・意見交換】(30分程度)

- ・グループ内役割分担 … リーダー、発表者、資料作成(グルーピング・構造化)、タイムキーパー
- ・付箋にサインペンでキーワードを記入する ⇒ グループ化 ⇒ 構造化
- ・授業担当学年 … 授業振り返り、全体協議で想定されるQ&A
- ・ファシリテーター…グループ討議の様子を観察

#### 4 プレゼンテーション【グループ協議の内容を集約説明】(1グループ3分)

- ・掲示した模造紙をもとに論点を集約して発表する
- ・発表者は3分以内にまとめる

#### 5 休憩(10分)【ファシリテーターは協議会進行計画を構築】

#### 6 全体協議会【改善向上を目指した協議】

- ・各グループの発表を構造化して集約、総括する
- ・次時の課題・ねらいを明確にする
- ・全体協議でまとまらないときは、後日、学習研修部で行う

#### 7 学習研修部のまとめ(または、講師の指導)

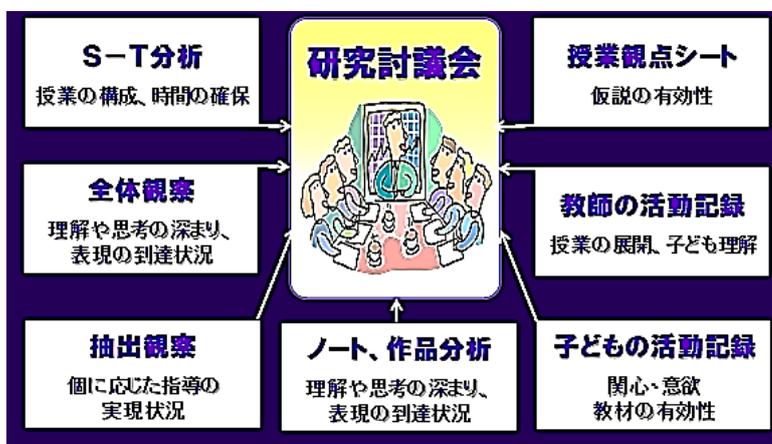


図3-2 多角的な視点で改善箇所を明らかに

### (3) 研究授業の総括

授業でのデータ、そしてそれを踏まえた討議から成果と課題を整理し、今後どのように取り組んでいくかを明確にして総括とします。また児童生徒がどのように変容したかも確認しておくことが大切です。

研究討議会のまとめ		〇〇年〇月〇日
成果	課題	
子どもの変容		
今後に向けて		

図3-3 まとめのシート

討議会の結果を左の図のような形でまとめておき、後日配付することで教職員一人一人の意識付けも確かなものになります。

研究授業が実施されるごとに、関係の資料をファイルに綴じておくと、随時、取組の内容を詳細に確認することができます。

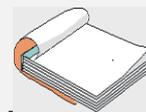
#### ファイルに綴じ込む資料（例）

- 研究授業で用いた教材（大きければ写真などで保存）
- 「まとめのシート」（図3-3）
- 学習指導案
- 授業記録（S-T分析データや活動・発言記録など）
- 授業中の写真画像 など

このようなまとめは、年度途中の取組の振り返りや年度末の総括の際にも活用できます（15 ページ、20 ページ参照）。

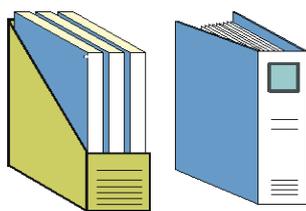
#### 一口メモ

#### 討議の結果を 明日からの授業に生かす



最近、多くの学校において研究討議会の最後に、明日からの授業への具体的工夫について考えようとする試みが増えています。

参加者が、研究授業と討議会での議論を踏まえて自分の授業で何か一つ工夫しようということを所定の用紙に記入するのです。いわば、「決意表明」のようなもの。これを集約して、研究推進委員会がまとめ、後日、研究部通信などの形で全体にフィードバックしています。



#### 授業研究のポイント

- ① 仮説を踏まえた、研究授業になっているか
- ② 共同で指導案づくりや事前授業が行われているか
- ③ 事前打ち合わせ—指導案づくり—事前授業—研究授業の手順がはっきりしているか
- ④ 指導案の中に研究主題や研究仮説が適切に盛り込まれているか
- ⑤ 子どもの実態を踏まえた指導案になっているか
- ⑥ 授業観察の役割分担、情報収集の手だてがはっきりしているか
- ⑦ 研究討議会の進行や内容がはっきりしているか
- ⑧ 研究授業が子どもの変容を中心に据えて、総括されているか

# 4

## 夏季校内研修

1学期の振り返りと2学期以降に向けて

### 1. 取組を振り返る

1学期を振り返り2学期以降の研究を進めるために、夏季に研修会を持つことが有効です。

#### (1) 1学期の成果と課題を整理

これまでの取組の成果と課題を児童生徒の変容という観点から整理しましょう。その際には、1学期に実施した研究授業などの状況を「研究討議会のまとめ」(14ページ 図3-3参照)で振り返ります。

#### (2) 2学期以降の取組の方向性を確認

1学期の取組を振り返ったうえで、2学期以降の方向性を教職員全体で確認します。必要に応じて研究内容(研究仮説や授業の観点など)を変更することもあり得るでしょう。しかしながら、校内研究は1年間を通して行うものですから、あくまで課題になった部分の変更であり、全体を変えるということではありません。

### 2. 授業・教材のアイデア交流会

#### (1) 報告シートの準備

研究主題や研究仮説にしたがって取り組んできた授業や教材の工夫についてのアイデアを交流します。図4-1のようなシートを前もって配付しておきます。

#### (2) 授業や教材の工夫の交流

①教材そのものや使用場面の写真、②目的、③成果、④今後のさらなる工夫、といった内容をまとめて交流会をもちます。各自、提供したシートをもとに簡単なプレゼンテーションを行います。

#### (3) 取組事例を項目ごとに整理

集まった事例を項目ごとに整理して綴じておくことで学校独自の授業・教材事例集ができあがります。

授業・教材の工夫事例報告シート	
教科・領域	氏名
使用場面(写真)	
目的	
成果	
今後のさらなる工夫	

図4-1 工夫事例報告シート

### 3. 外部講師を招聘して研修会

#### (1) 講師との打ち合わせ

夏季校内研修で外部講師を招聘する場合には、事前に研修担当者などが講師と打ち合わせをします。その際には、学校の状況や取り組んできている校内研究の内容・進捗といったもの、さらには日頃疑問に感じていることなどを伝えておきます。

#### (2) 「取組の評価」を評価してもらおう

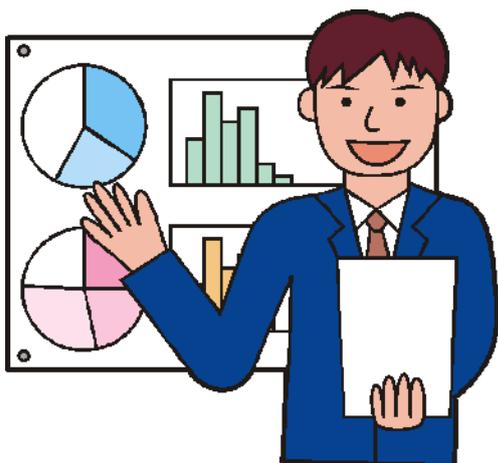
せっかく外部講師を招聘するのですから、この機会を活用して自校の取組についての評価をしてもらいましょう。その場合、まず校内で取組を整理（「1. 取組を振り返る」で記載した内容）して教職員間で評価したものを示したうえで、今後の方向性も含めた示唆を受けると効果的でしょう。



#### (3) 研修会のまとめを全教職員へフィードバック

研修講師から提供された資料、講話の内容、学校の取組への評価の中身、さらにはワークショップなどを開催した場合に教職員から出てきた意見などをまとめて、それほど日が経たないうちに全教職員へフィードバックすることにより、研修内容をそれぞれが個々にも振り返ることができます。

内容のまとめなどは、研究部通信などを活用しましょう。このようなまとめをつくっておくと年度末の取組の整理の際にも役立ちます。



# 5

## 校外研修・研究会等の活用

様々な実践事例を校内に取り入れる

### 1. 案内の校内への周知

様々な研修会や研究発表大会などの案内が学校に来ても、通常は忙しくてじっくり内容を確認する時間がないのではないのでしょうか。そこで研究推進委員会などが窓口になり、案内が来るたびに、その内容を一覧にして職員室の所定の場所に掲示しておきましょう。項目は次のようなものにします。

- 日時
- 場所
- テーマ
- 研究授業があるならその校種と教科
- 講師・発表者等
- その他（学校からの出席予定者記入欄）

この一覧表を見て、現在の事項の研究主題に照らして、参加しておくべき研究発表大会などに学校から代表して参加するようにします。

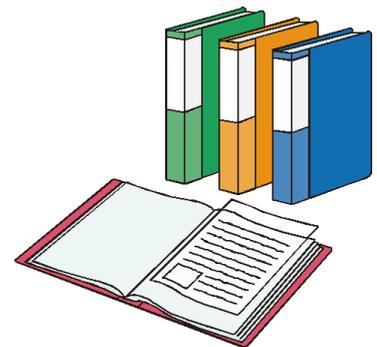
### 2. 校内への報告

#### （1）報告用にまとめる

- ① 日時・場所・テーマ・講師や発表者名など基本的な事項
- ② 全体の概要を簡潔に（「3年 国語科 研究授業」や「講演 『〇〇について』」など）
- ③ ポイントとなることを箇条書きで記述する
- ④ 研究主題とのかかわりを中心に出席した者の感想を簡潔に記述する

#### （2）校内で報告会（研修会）

時間があれば、校内の全体研修会や職員会議の場などで報告します。報告の時間がなければ、（1）でまとめた内容を「研究部通信」に掲載して全教職員に配付します。もらってきた指導案や研修資料などは、上記のまとめとともにファイルに綴じておきます。このファイルは校外研修のポートフォリオとして職員室の所定の場所に置いておき、常時閲覧できるようにしておきましょう。





## 取組事例 2

# 授業研究週間で学校の活性化

## 大阪府立泉尾高等学校の取組

大阪府立泉尾高等学校では、一人一人の生徒が自発的、主体的に活動することで、成長し自信をもつことができるように、教員が協力し、わかる授業、受けたい授業、頑張りたい授業、頑張れる授業づくりをめざしています。

その取組のひとつとして、校内の「元気プロジェクト」として学期に1回授業研究週間を開催しています。内容は次のとおりです。

### ○実施の趣旨

- ・お互いのもっている技術や方法・しくみ・工夫を共有し、生徒情報の共有をすることで、生徒に対してより的確なアプローチが期待できる。
- ・研究週間を定期的に設けることにより、教員の授業力を深めていだけでなく、教員の学ぶ姿、成長する姿を生徒に示し、学校を活性化することができる。
- ・他の教員が授業に入り込むことで授業にアクセントが付き、生徒のモチベーションを上げる一つの機会とすることができる。

(泉尾高校「授業研究週間」実施要項より)

### ○実施の方法

- ・公開授業者の時間割を配付。参観者の制限は設けない。
- ・授業研究週間中、各日1講座ずつ「ポイント授業」を設定し、多くの教員が特にその授業を参観できるようにする。
- ・授業参観者は授業後、「感想用紙」を記入して授業者に渡す。
- ・放課後（16：00をめど）に意見交流会を実施する(短時間)。

泉尾高等学校では、上記の取組と並行しながら、大阪府教育センターの「パッケージ研修支援」を活用して、生徒の実態を共有化し、授業づくりを共同で行い、研究授業・研究討議会を通して学校全体で成果と課題の検証を行っています。

生徒にとり学校生活の大半を占める授業を、生徒・教員双方にとつての基盤ととらえ、知識だけでなく、生徒との信頼関係を深め、生徒のさまざまな能力を伸ばすサポートや指導ができる機会と考えています。

### ○意見交流会について

- ・授業者・参観者以外にも、誰でも参加できる。
- ・「ポイント授業」を中心に、授業者が感想・反省・工夫点・配慮事項を発表し、参加者全員で良い点や共有したいものをまとめる。
- ・日常の授業において困っていることなどについて自由に意見交換する。

### ○授業研究週間アンケートの実施

授業研究週間終了後、今後のあり方や、授業やテストなどについての意見交流のためにアンケートを実施しています。

特に、授業やテストに関するアンケート項目は次のようなものです。

#### 教材教具について

プリント作成で工夫しているところ

教材研究する時間・タイミング

多忙な中で教材研究を効率よく行う工夫 など

#### 授業について

ノート学習とプリント学習のメリット、デメリット

生徒をやる気にさせる、落ち着かせる工夫

板書の工夫・黒板の使い方 など

#### 生徒指導について

注意の仕方や注意する上での工夫・配慮 など

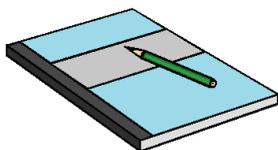
#### テストについて

テスト作成において重要視する点 など

#### その他

### ○授業研究週間まとめの配付

- ・「授業研究週間アンケート」の結果を中心に授業研究週間のまとめを元気プロジェクト 教研部から全教職員に対して配付。



## 2. 一人ひとりの授業改善の取組を進める

校内研究の主題との関連性をもたせたいうで、授業改善について個人のテーマ（課題）を設定しその進捗を記録していくことで校内研究がより具体的に学校全体に広がります。

- 授業改善の個人研究用のファイルを用意します。これには個人研究シート（後述）をはじめとし、指導案や教材等をファイリングしていくことで「授業改善のポートフォリオ」になります。
- 授業改善の個人研究シートに自己テーマ（課題）を設定して必要事項を記入します。
- ポイントは課題が解決された際の具体的な形を児童生徒の変容の観点でイメージすることと簡単なスケジュールを立てること。
- 記入する項目は、①校内研究の主題・仮説、②自己のテーマ（課題）、③課題が解決された際の具体的な姿、④課題解決のための具体的方策、⑤簡単なスケジュール など。
- 校内研修の際などに配付された資料や、自ら作成した指導案や「授業・教材の工夫事例報告シート」（15 ページ 図4-1 参照）などをファイリングしておきます。



### 「個人研究シート」の例（英語科の場合）

#### 【研究主題】

まとまった内容のものを筋道立てて考えて、明確に表現する力を育む指導の研究

#### 【研究仮説】

具体的な学習課題を提示して、考えたことを交流する機会を設定することで筋道立てて考える力がはぐくまれるだろう

#### （課題）

生徒が意欲的に自由英作文に取り組むこと

#### （課題が解決された際の具体的な姿）

- ①書こうとするテーマを設定して、とりかかろうとする
- ②まとまりのある内容で、5文以上の英文で構成される文章が書ける

#### （課題解決に向けての具体的方策）

- ①単文から2～3文の作文課題を毎時間、必ず出す
- ②作文の型を提示する
- ③生徒の作文を分析する

#### （簡単なスケジュール）

- |       |                          |
|-------|--------------------------|
| 4月～5月 | 毎時間、単文から2～3文の作文課題を練習する   |
| 6月～7月 | 型を提示しながら、まとまった文章を書く練習をする |
| 7月～8月 | 夏休みの思い出を簡単な作文にする準備       |
| 9月    | ミニ作文集の作成                 |

# 7

## 研究のまとめと評価

成果と課題を整理して次年度につなげる

### 1. 年間の取組の総括

1年間、取り組んできた校内研究を子どもの変容という観点から総括します。期待どおりの、あるいは期待した以上の変容はあったか、あったとすればその主たる要因は何か（成果）、そして改善すべき点は何か（課題）といったものを具体的に整理し、次年度の取組につなげましょう。

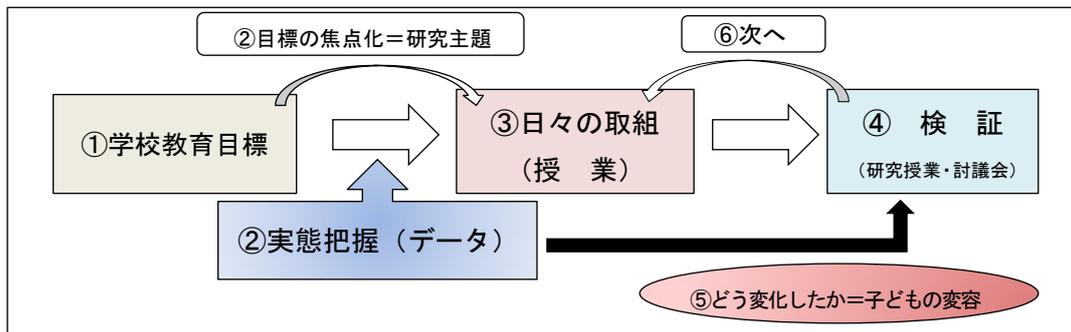


図7-1 校内研究のイメージ (再掲)

図7-1は1章でも掲載した校内研究のイメージ図です。年度当初に児童生徒の実態をデータとして把握しました。それを踏まえた研究主題にのっとり取り組んできた結果がどうなったのかということ「子どもの実態はどう変化したのか」という観点で学校全体として振り返ります。

### 2. 学校全体で振り返り、成果と課題を整理して次年度へ

#### (1) 評価原案作成のための校内研究評価委員会を設置

- 評価のための原案を作成するために、評価委員会を設置しますが、研究推進委員会が原案づくりをおこなってもよいでしょう。
- 学校全体で振り返るデータなど、これまでの校内研究の内容を整理します。
- 研究授業・討議会等での成果と課題を一覧にします。このとき、「研究討議会のまとめ」(14ページ参照)を活用します。

#### (2) 評価原案（項目と観点）づくり

- 「校内研究評価の観点」一覧(図7-2参照)や校内研究の刊行物、他校の作成しているものを参考にして、評価委員会で観点を入れた評価表を作成します。
- 取組の結果、明らかとなった成果と課題を踏まえて、教職員一人一人にアンケート形式で評価の集約を行います。

### (3) 評価方法の説明と評価の実施

- 朝の連絡会などにおいて説明をして、全教職員に配付します。各自の評価表提出期日は厳守です。

### (4) 提出された評価表の集計と分析

- 評価委員会において、提出された評価表を類別します。校内研究総括のための全体研修会（職員会議）に向けての総括原案になります。
- 特定の項目に意見が集中している場合などは、その解決策をあらかじめ考えておく必要があるでしょう。

### (5) 全体研修会を実施

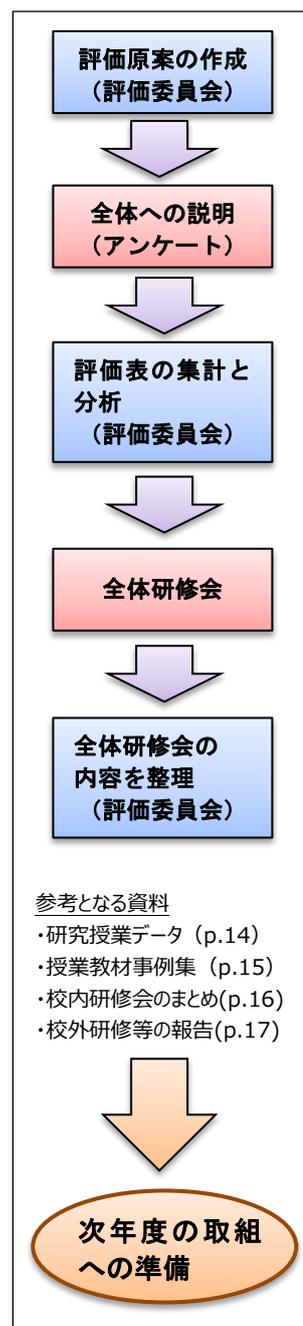
- 評価委員会から提出された校内研究の総括原案をもとに学校全体で総括（成果と課題の整理と次年度に向けての方向性）を行います。

#### 全体研修会（進行次第）例

- ア 研究主任より全体研修会の主旨説明
- イ 各分科会代表の報告
- ウ 評価表のまとめと研究成果の報告
- エ 全体で協議（子どもの変容を中心に校内研究の成果と課題の整理）
- オ まとめと今後の方向付け

### (6) 全体研修会の結果を評価委員会で整理

- 全体研修会で協議された内容などを整理します。
- また、研究授業の際の教材や指導案、討議会の記録などさまざまな資料も閲覧しやすい形にまとめておきます。
- このような資料は、次年度に新たな取組をスタートする際や、新転任者に学校の取組の経過や方向を伝えることに役立ちます。



#### 参考となる資料

- ・研究授業データ (p.14)
- ・授業教材事例集 (p.15)
- ・校内研修会のまとめ(p.16)
- ・校外研修等の報告(p.17)

図7-2

校内研究の評価の流れ（例）

## 3. 次年度の取組への準備

全体研修会で総括した内容を踏まえて、次年度の取組の準備を年度内にしておきましょう。正式な決定は新年度になり体制が確定してからですが、早くに準備をしておくことでスムーズなスタートを切ることができます。

- 学校教育目標の共有化、子どもの実態把握調査
- 研究の組織体制
- 研究主題・研究仮説設定までの段取り
- 研究計画素案（枠組み）



## 校内研究評価の観点（例）

### ① 研究主題の設定

- ア. 児童生徒の実態に基づくものであったか。
- イ. 十分に分析され、具体化されていたか。
- ウ. 明確化され、一人一人が理解していたか。
- エ. 学校教育目標と関連の深い主題となっていたか。 など

### ② 研究仮説の設定

- ア. 文献や資料を十分に参考にして適切に設定されていたか。
- イ. 実践にいかされるまでになっていたか。
- ウ. 仮説の構成要素（範囲、てだての工夫、子どもの変容）を踏まえていたか。
- エ. 研究の進展につれて修正されてきたか。 など

### ③ 研究計画

- ア. 研究組織は各人の能力が十分いかされる仕組みになっていたか。
- イ. 研究日程は学校行事やその他の行事との均衡をとり、無理なくつづられていたか。
- ウ. 文献や資料の収集、活用などの見通しをもっていたか。
- エ. 検証の方法が適切であり、全員に理解されていたか。 など

### ④ 研究推進過程

- ア. 検証のための予備的調査がきちんと行われたか。
- イ. 研究遂行のための記録方法や用具が整えられ、正確に記録されたか。
- ウ. 研究過程は合理的で、常に評価をしながら研究をすすめたか。
- エ. 仮説の成果を常に比較しながら、検証を正しく行っていたか。 など

### ⑤ 成果のまとめと活用

- ア. 子どものどんな能力が、どんな条件で、どう変容したかを明確につかめたか。
- イ. 問題点が具体的資料や記録から明らかになったか。
- ウ. 研究によって、教員の資質が向上したか。
- エ. 研究のまとめがだれにでも活用できるようにまとめられているか。
- オ. 成果をいかして今後も研究を発展させるよう方向づけがなされているか。
- カ. 成果を公表して再評価を受けることを検討しているか。
- キ. 成果を日常活動の中でどう利用するのかが明らかになっているか。 など

（福岡県教育研究所連盟 編「校内研究のすすめ方」より 改編）

図 7 - 3 校内研究の評価観点例

## 参考資料

- 福岡県教育研究所連盟（編）「校内研究のすすめ方」 第一法規 昭和 60 年 3 月 20 日 11 刷
- 岩手県立総合教育センター「校内授業研究の進め方ガイドブック」 平成 19 年度
- 岩手県立総合教育センター「校内授業研究の進め方ガイドブックⅡ」平成 20 年度
- 大阪府教育センター「大阪の授業STANDARD」平成 24 年 5 月
- 大阪府教育センター「高等学校の授業評価に関する研究」平成 25 年 3 月

# 授業づくり 編

「授業づくり 編」は、平成 24 年度に実施した「校内研究支援プロジェクト 地区別・校種・教科領域別 授業改善ワーキング」のうち、小学校国語・算数・理科・外国語活動、中学校国語・数学・理科・外国語、小中合同道徳教育のワーキングで取り組んだ内容をまとめたものです。いずれも「大阪の授業 STANDARD」をもとに授業づくりについて、それぞれの教科領域での指導のポイントを示しています。

なお、理科の授業づくりについては、大阪府教育センターが出している「理科授業づくり」も参照してください。

## ◆ 国語の授業づくりのポイント

### 1. 授業づくりの方向性

#### (1) 付けたい力を明確に意識する

国語科では、実生活に生きて働く言葉の力を育むことを大切にしています。

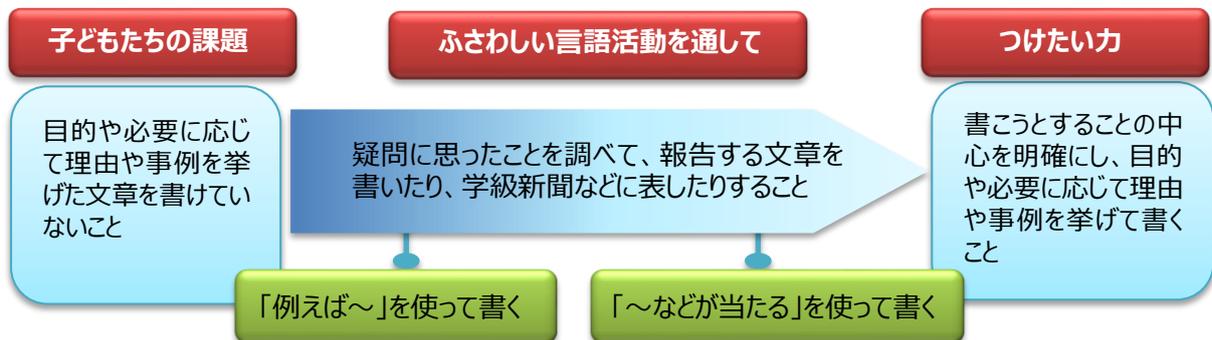
どんな言葉の力を育む必要があるのかを学習指導要領の指導事項から取り上げて、「付けたい力」として明確に意識して指導することが大切です。以下の項目をふまえ、指導者として、単元終了時において子どもたちにどんな力を付けてほしいのかイメージする必要があります。

学習指導要領の指導事項をふまえる

子どもたちの課題や実態、発達段階や年間指導計画、教材の価値や特性などを参考にする

#### (2) 付けたい力を付けるのにふさわしい言語活動を設定する

当該単元で重点的に指導すべき指導事項を「付けたい力」として確定し、学習指導要領に示されている言語活動例を参考にして「付けたい力」を付けるのにふさわしい言語活動を設定します。また、この言語活動は、子どもたちの課題を解決していくための過程になるように設定します。



#### (3) 付けたい力を付けるための指導計画を作成する

言語活動が設定されたら、どのような学習活動や方法が必要なのかを考えて、具体的な指導計画を立てていくことが大切です。『大阪の授業スタンダード』が示す子どもたちが主体的に学んでいくための5つの段階を参考にします。子どもたちが主体的に課題を解決していく学習過程を意識することで「付けたい力」を付けることにつながります。



## ◆ 小学校国語における「大阪の授業スタンダード」

### 1. 子どもたちが主体的に考えられる課題の提示

#### ●課題を自分の問題として受け止めさせ、学習意欲を喚起する

教材や課題との出会いを大切にすることで、子どもたちの「やってみよう。」「考えてみよう。」という学びに対する意欲を高め、子どもたちが主体的に学習に取り組む授業を作っていきます。

子どもたちが主体的に学習に取り組んでいくためには、教材や課題との出会いの場面はとても大切です。子どもたちの興味や関心がわくような工夫を取り入れたり、学習のねらいを達成させ得る学習課題を提示したりするなど、子どもたちが学ぶ意欲を高めていくことができるような出会いにしていきます。

## 比較できる教材を使って課題に出会う

### 取組事例 1

### 小学校ワーキング(中・南河内地区)の模擬授業より

小学校国語ワーキング(中・南河内地区)では、『ものの名まえ』(光村図書 1 年下)を教材として扱い、子どもたちに、本時の課題とどのように出合わせることで、子どもたちが意欲的に学んでいくのかを考えました。



#### 【つきたい力…書くこと 指導事項イ】

自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること

#### 【本時の課題】

よりよいチラシになるように必要な事柄に気づき、ちらし作りの見通しを持つ

このようにつきたい力や本時の課題を設定し、子どもたちはお店のチラシを簡単な構成を考えて書くという学習を設定しました。

本時では、3つのチラシを比較し、どのお店に行きたくなるのかを考えることで、チラシに必要な事柄に気づき、自分が書くチラシに活かすことをめざしました。

パン屋さん  
 やきたてのいいにおい  
 がいつもしているパン  
 ンやです。  
 大きくて食べるとふわ  
 わふわしているとき  
 い「メロンパン」が  
 おいしいですよ。  
 おまちしております。

パン屋さん  
 やきたてのおいしい  
 パンがたくさんありま  
 す。  
 あんパンやカレーパ  
 ン、サンドウィッチも  
 ありますよ。  
 おすすめはメロンパ  
 ンです。  
 ぜひきてください。

「いいにおい」などのパンの特徴や種類が書いてあるチラシと、ほとんど書かれていないチラシを比べます。そうすることで、特徴や種類を書く必要性に気づくことができます。

パン屋さん  
 パンをうっていま  
 す。  
 きてください。

書かれている言葉に着目し比べていくことで、「どこが違うのだろう」と興味を持って考えていくことをねらいました。本時のねらいを達成させ得る課題に主体的に出会う工夫を考えました。

## 2. 子どもたちが課題の解決に向けた見通しをもつ場の設定

### ●学習した表現を活用するなど、既習の知識が使えるかを考えさせる

学習課題の解決に向けて、これまで経験したり学習したりしたことが活用できないかと考えながら、取り組む学習全体の流れをつかみます。

例えば、学級新聞を書く活動に取り組む際に、市販されている新聞にどんなことが書かれているのかを話し合うなど、学習課題と自分の生活経験を結び付けます。また、物語を読み取る学習に取り組む際に、前時までに学習した登場人物の心情の変化を模造紙等に掲示しておき、本時の読み取りに活用するなどの工夫も考えられます。

小学校国語ワーキング（北河内地区）では、『ドリームツリーを作って話そう』（学校図書4年上）を教材として扱い、提示した学習課題と生活経験を結び付けていくことで、学習課題と学習の流れを具体的にイメージできる工夫を考えました。話すこと・聞くことの学習でのスピーチ原稿を書く学習をイメージして考えました。



【学習課題】  
ドリームツリーを使って、わかりやすいスピーチ原稿を書こう

【ドリームツリーに書く内容として考えられること】

- 自分の将来の夢について考えたこと
- どうすれば自分の夢がかなうのか考えたこと
- 夢が実現したら何ができるのか考えたこと
- 自分のめざす職業について調べたこと など

子どもたちの生活に関連させた教材を使ったり、今まで学習してきたことを思い出せるような資料を用意したりすることで、子どもたちは学習課題や学習の流れを具体的にイメージしていけるようになります。

## 3. 言語活動を通して目標を達成していく

### ●「付けたい力」を付けるのにふさわしい言語活動を取り入れ、課題を解決させる

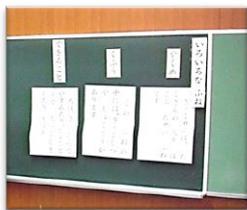
どんな言語活動を設定すれば、「付けたい力」を育み、目標を達成することができるのかを考えて、その力や目標を達成するための言語活動を学習活動に位置付けるようにします。

小学校国語ワーキング（三島地区）では、『いろいろなふね』（東京書籍1年下）を教材として扱い、課題への向き合い方を考えました。

【言語活動】  
段落に分けたカードを並べかえ、なぜその順番にならべかえたのかを話し合う。



【付けたい力】  
時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。



カードをならべかえる際に、子どもたちが大事な言葉に着目してならべかえるようにします。そうすることで、大事な言葉を教材から読み取っていくことができます。

時間的な順序や事柄の順序を読み取る際に、時間や事柄を表す大事な言葉に着目して読み取ることを、言語活動を通して指導します。

#### 4. 友だちとの考えをつなぎ、考えを深める活動の設定

##### ●ペアやグループ交流などの授業形態を効果的に取り入れ、考えをつなぎ深める

つなげる段階では、子どもたちの考えをお互いに伝え合い、考えを共有するために対話やグループ交流、全体交流などを目的に応じて取り入れることが大切です。

小学校国語ワーキング（泉北・泉南地区）では、『ものの名まえ』（光村図書1年下）、『注文の多い料理店』（東京書籍5年下）、『海の命』（光村図書6年）を教材として扱い、単元の指導計画を考えました。

	【ものの名まえ】	【注文の多い料理店】	【海の命】
本時の目標	クイズを通して知っていることを友達に紹介し合う方法を思い出すこと。	次々に出る「注文」の料理店の様子や料理の様子を思い出して、自分の意見を述べる。	大ーの心の変化がわかる表現に気づき、自分の意見を述べる。
1 出会う	実物、または絵や写真の類をばらばらに切り取り、名前を思い出してつなげる。	料理店の口にお名前を思い出せるか想像する。	「なぜその主を殺したのか」という課題に出会う。
2 結びつける	教科書のワークシートを使い、クイズの名前と名前を思い出してつなげる。	題名「注文の多い料理店」の注文が何なのかを調べる。	前時までの大ーの心の思いを復習する。
3 向き合う	まとめた「ものの名まえ」のクイズを発表して見せる。	どんな注文があったのかを発表する。	課題に対しての自分の考えを文庫化する。
4 つなげる	考えたクイズ形式で発表する。	注文の多い料理店の様子を確認し合う。	書いた考えを班や全体で交流する。
5 振り返る	他のグループの発表を聞いて良い所や新しい発見に気づく。	注文の多い料理店やバリエーションを思い出せるか調べる。	今日の学習のめがけを復習する。

考えをつなぎ、深める段階では、「考えたことをクイズ形式で発表する」、「注文とその時の紳士の様子を話し合う」、「書いた考えを班や全体で交流する」などの学習活動を取り入れました。子どもたちが何のために、どんな交流をするのかを意識できるようにすることが大切です。

考えをつなぐ際の  
留意点の例

- 友だちの考えを大切に聞くことを意識させる。
- 自分と友だちの考えを比較して聞くことを意識させる。
- 何を伝え合うのかという観点を示し意識させる。
- 話型や司会の仕方などの既習の知識を生かすようにさせる。
- 友だちの話には、感想や思ったことを伝えるようにさせる。
- 考えが深まったことや新しい発見についてふりかえらせる。

など

#### 5. 子どもたちが自分に付いた力を振り返り、言葉で表す場の設定

##### ●目標に照らし、自分の学びを振り返らせる

目標をふまえて、わかったことや自分が成長したと思うことなどを、ノートに書いたり、クラスの中で共有したりすることで、自分の学びを振り返らせませす。

指導者として本時の目標が達成できていたかどうかを、子どもたちの姿や書いたノートなどから評価していくことも大切です。

また、授業参観シートなどを活用し、お互いの授業を参観して、子どもたちの活動の様子や、指導者の発問や指示などについて話し合い、授業づくりに生かしていくことも大切です。

分類	観察の観点
集団としての学習規律	子どもたちが友だちや先生の話をしっかり聞く態度や発言のルールを身に付けているか。
本時の目標の設定	本時の目標が明確になっていて、子どもたちが意識できているか。
言語活動	教材分析をもとに「付けたい力」にふさわしい言語活動が取り入れられているか。
わかる授業に向けた教材の工夫	学習活動に効果的な教材・教具や板書の工夫ができているか。
明確な発問	子どもたちにとってわかりやすい発問や指示になっているか。
子ども主体の授業	子どもたちが自分で考え、解決していく時間を十分設定しているか。
机間指導や支援	支援が必要な子どもたちに具体的な支援を行い、子どもが課題を解決しようとしていたか。
授業形態の工夫	課題解決のために、ペアやグループ交流などの授業形態が効果的に取り入れられているか。
評価	評価規準に沿って、子どもたちに肯定的な評価をしているか。
ふりかえり	本時の目標が達成され、子どもたちが自分の学びや疑問をふりかえる場面があるか。

授業観察の観点 国語ワーキング作成「授業参観シート」より

## ◆ 算数の授業づくりのポイント

### 1. 授業づくりの方向性

学習指導要領の算数科の目標のはじめには「算数的活動を通して」とあり、この部分が目標の全体にかかっています。つまり、算数的活動を通して、知識・技能ならびに数学的な思考力・判断力・表現力を育成していくことが大切です。

算数的活動として、作業的・体験的な活動など身体を使ったり、具体物を用いたりする活動を主とするものがあげられることが多いですが、それだけではありません。算数に関する課題について考える活動や、考えたことを表現したり、説明したりする活動も算数的活動に含まれます。まさに言語活動です。

算数科における言語とは、言葉だけではなく、数、式、図、表、グラフなども含まれます。これらを用いた言語活動を充実させ、思考力・判断力・表現力等を高めていくことが大切です。ここで注意しなくてはならないことは、言語活動の充実は手段であり目的ではないということです。「話し合い活動をさせればよい」や「発表の仕方を教えればよい」など、言語活動の充実を目的とした取組ではなく、数学的な思考力・判断力・表現力等を育成するためにどのような言語活動を取り入れた算数的活動をすればいいのかという視点で授業づくりをしていくことが大切です。その中でも特に、以下のような力を育てる算数的活動を充実させる必要があります。

#### 算数的活動

児童が目的意識をもって主体的に取り組む算数にかかわりのある様々な活動

#### ●筋道立てて考える力

数学的な思考力・判断力・表現力等を育成するためには、見通しを持ち根拠を明らかにし筋道を立てて考える活動を充実させる必要があります。そのために、解決の方法を考えさせたり、それぞれの計算で何を求めているのかを意識させたり、意味理解を重視した授業構成を工夫することが大切です。

#### ●割合や単位量当たりの考え方など、数量関係を捉える力

何をもとにして考えたのかなど、基準量、比較量、割合の意味を理解し、数量関係を捉えて演算決定する力を育てることが必要です。そのために、問題場面と図や式を結び付けて考える指導の充実を図ることが大切です。

#### ●自分の考えを論理的に説明できる力

言葉だけでなく、数、式、図、表、グラフなどを適切に用いて、自分の考えを分かりやすく説明したり、互いに自分の考えを表現し合ったりする学習活動を充実させることが大切です。

### 2. 算数における「大阪の授業スタンダード」

#### (1) 出合う（課題をつかむ）

この場面は、算数科においては、問題と出合う場面です。そして、今までとの違いから、この問題で学ぶべき学習課題と出合う場面でもあります。この場面においては、まず、提示した問題を子どもが主体的に受け止め、解決しようとする意欲を持つことが大切です。そのために、日常生活に結び付いた身近な素材から問題を設定したり、驚き・不思議さ・必要感や不都合感

など子どもが自分の問題として受け止められるような要素を取り入れたりすることが重要です。日常生活との結びつきは、算数科の目標である「進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる」という点からも大切です。

また、この場面において

- ・大切な要素を見つける（分かっていること、分からないこと、問われていることなど）
- ・数学的な関係をつかむ（何をもとにして考えている、どちらの方が大きいなど）

など、問題の意味をしっかりと理解させることが大切です。

### 具体事例

「クラスの水筒チャンピオンを決めよう」という問題に、指導者が提示したコップは子どもたちのコップと比べて小さすぎるので比べられないという不都合感から、みんなが納得する比べ方を考えようという学習課題を設定します。



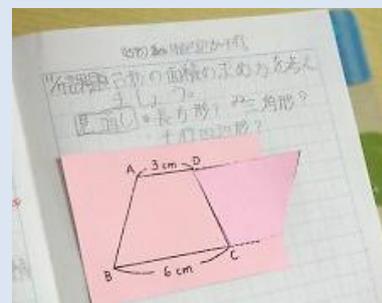
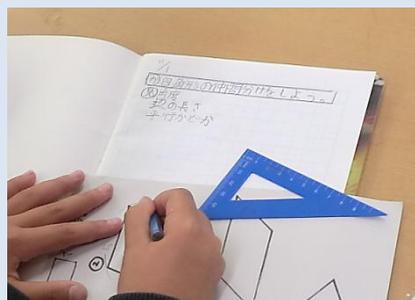
「乗法を用いて問題を解決しよう」という課題に、問題文から読み取れること、既習事項から想起されることをあげ、黒板で整理します。その中から、大切な要素を見つけたりそれぞれの数学的な関係をつかんだりします。

### (2) 結び付ける（見通す）

この場面は、自力解決への見通しを持つ場面です。見通しには、結果の見通しや方法の見通しがあります。問題によっては、演算の見通しを考える場合もあります。指導者が、全員が一人で課題に向かうことができるように、どのような見通しを持たせるべきかを考え指導することが大切です。そのために、既習事項の何が活用できるのかを考えさせ、それを手掛かりに解決へと向かわせることが大切です。

### 具体事例

「台形の面積の求め方を考えよう」という課題に、平行四辺形や三角形の面積を求めた時の考え方を生かして「長方形にして考える」「平行四辺形にして考える」「三角形に分けて考える」などの見通しを交流し、その見通しをもとに自力解決に取り組みます。



「四角形を仲間わけしよう」という課題に対して、何をもとに仲間わけするかの見通しを考えます。前回の仲間わけや自分たちが比べられる要素をもとに、「辺の長さを比べる」「角度を比べる」「平行な辺を調べて比べる」などの見通しを交流し、その見通しをもとに自力解決に取り組みます。

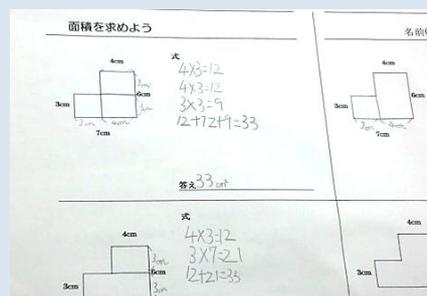
### (3) 向き合う（解決する・自力解決）

この場面は、見通しをもとに1人で課題に向き合う場面です。子どもが自信をもって自分の考えを進められるように言葉かけや支援を行うことが大切です。そのために、時間を十分に確保し、学習具やヒントカードを用意したりワークシートを工夫したりして、一人ひとりにしっかり思考させることが重要です。また、図を使って考えたり、具体物を操作して考えたり、式の決まりを使って考えたり、自分なりの方法で解決する活動に取り組ませることが大切です。

この場面での指導者の役割として、個に応じた支援を行うことはもちろん、集団解決に向けての発表者を抽出することも大切です。また、早く解決できた児童に複数の考え方をさせたり発表の準備をさせるなど、解決する時間の個人差への対応も考える必要があります。

#### 具体事例

複合図形の面積をいろいろな方法で求めることができるように、ワークシートを工夫します。



箱の体積を求める場面で、具体物を使って考える児童のために、 $1 \text{ cm}^3$ のブロックを学習具として準備します。

### (4) つなげる（練り上げる・集団解決）

この場面は、それぞれの考えを発表させ、それを聴き合い考えを高め合う場面です。そのために、具体物や図、式などを使って自分の考えをしっかりと説明する活動を大切にします。説明する活動を通して、数学的な思考力・判断力・表現力等を育てることができます。

また、それぞれの考えをつなぎ練り上げることが大切です。そのためには、具体的表現から抽象的表現へなど、考えが深まるように発表順を工夫することが大切です。また、算数科の特徴である明瞭性、簡潔性、一般化、効率性、能動性などに向かうように、「分かりやすい考えはどれですか」「簡単な考えはどれですか」「いつでも使える考えはどれですか」など、考えが深まる発問を工夫する必要があります。

#### 具体事例

三角形を仲間わけした方法について、ペアで説明し合います。全体で説明できる児童は数人ですが、この活動で一人一人が自分の考えを説明する機会を作ります。



$9 + 6$ の計算の仕方を考えるときに、順番に数える考えや10のかたまりを作る考えなどをブロックなどの具体物や図を使ってしっかりと説明させます。その考えの中で、「早く答えを見つけれられる方法はどれかな」と発問し、10のかたまりを作るよさに気付かせていきます。

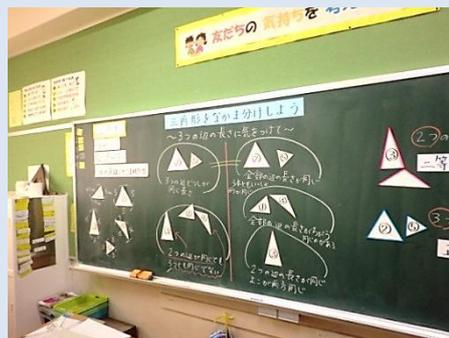
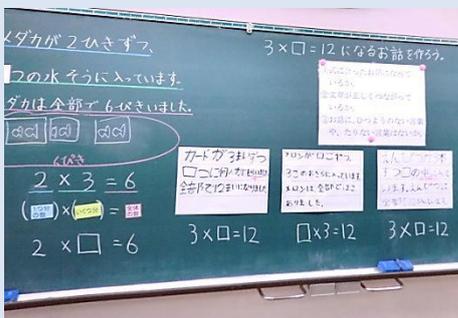
## ●数学的な思考力・判断力・表現力等を育成するための練り上げの場面の工夫

練り上げの場面では、多様な考えを比較するだけではありません。1つの考え方についてもう一度とらえ直したり深く考えたりするなど、思考力・判断力・表現力等を育成するための活動を工夫することが大切です。『わかい』（分かりやすい考え、簡単な考え、いつでも使える考え）を選ぶ」「仲間わけをする」「同じところ、ちがうところを考える」など以外に、下のような活動も考えられます。形にこだわらず、授業のゴールに向けた練り上げを行うことが大切です。

- ・ 正誤を検討する
- ・ 公式に仕上げる
- ・ 理由を考える
- ・ 他の子の考えを説明する
- ・ わからない子が、他の子の考えで分かる
- など

### 具体事例

三角形を仲間わけしたそれぞれの方法を発表し、それぞれの考えの違いについて話し合い、二等辺三角形の特徴に焦点化します。



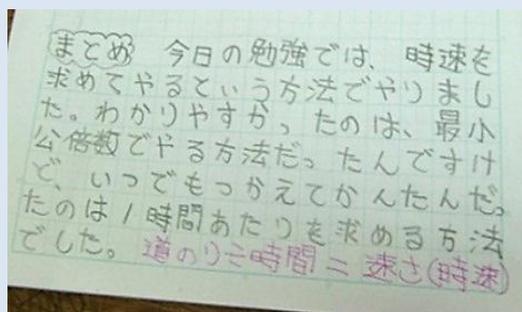
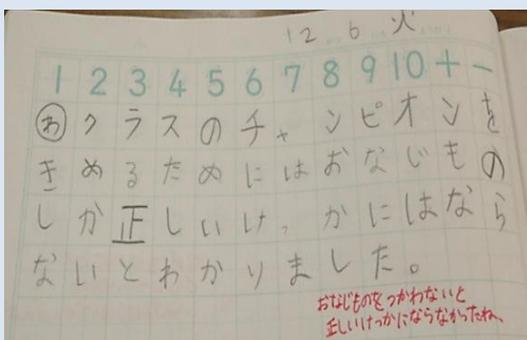
$3 \times \square = 12$  になるお話を作って発表し、それぞれのお話が式に合うお話になっているか、また何を書き加えれば式に合うお話になるかを考えます。

### (5) 振り返る（まとめる）

この場面では、学んだことを自分の言葉で表出させて子ども一人ひとりの学びを把握し、次時の指導に役立てることが大切です。そのために、楽しかったことやおもしろかったことなどの情意面だけでなく、分かったことや気づいたことなどの認知面についても書かせる必要があります。また、確認問題などを行い、学んだ考え方を類似問題で試すことも大切です。

### 具体事例

このまとめの中では、「いつでも使えて簡単だったのは・・・」という認知面での「わかい」の気づきが書かれています。



量を比較するときに単位量が必要なことへの気づきが、低学年年りの言葉で表現されています。このようなまとめを書けるような授業にするためにはどのような練り上げが必要か、そのためにどのような自力解決をする必要があるかなど授業をゴールから考える発想が大切です。

## ◆ 小学校理科の授業づくりのポイント

### 1. 授業づくりの方向性



#### 小学校理科の目標

理科の目標を実現するため、次のことを大切にしながら授業づくりを進めることが必要です。

#### ●自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行うこと

- ・児童が関心や意欲をもって自然の事物・現象とかかわり、対象である事物・現象から問題意識を醸成するように意図的な活動を工夫することが大切です。
- ・児童が自ら見いだした問題に対して、予想や仮説をもち、それらをもとにして観察、実験などの計画や方法を工夫して考えられるようにします。
- ・観察、実験などの活動は、児童が自ら目的、問題意識をもって意図的にできるようにします。

#### ●問題解決の能力と自然を愛する心情を育てること

- ・問題解決の能力を育むには、授業そのものが問題解決の過程でなければなりません。各学年で中心的に育成する問題解決の能力は学習指導要領に示されており、それを踏まえた授業づくりが必要です。
- ・栽培や飼育などの体験活動や動植物の観察を通して、自分を含む動植物のつながりや、生命についての考えを深め、生命を尊重しようとする態度や自然を愛する心情を育むことができるようにします。

#### ●自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養うこと

- ・単元を通して、児童が自ら問題解決を行ったという実感を得られるようにし、理科の学習で学んだことが、実際の自然の中で成り立ち、生活に役立っていることに気づくことができるようにします。
- ・児童の自然についての素朴な見方や考え方を、観察、実験などの問題解決の活動を通して、科学的なものに変容させるとともに、その方法を身に付けられるようすることが大切です。

## 2. 小学校理科における「大阪の授業スタンダード」

小学校理科の目標を実現させるためには、単元を通して児童が主体的に問題解決を行い、科学的な見方や考え方を養えるよう、次の6つの学習の過程を組み合わせ、単元を構成します。

<p><b>1 事象と出会う</b> [体験活動]</p> <p>&lt;自然事象へのはたらきかけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関心や意欲をもって対象とかかわり、問題発見できるように。</li> </ul> <p>&lt;問題の把握・設定&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師の意図的な活動の工夫により、問題意識を醸成する。</li> </ul>	<p><b>2 見通しを立てる</b> [言語活動]</p> <p>&lt;予想・仮説の設定&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 問題に対する児童の考えを顕在化する。</li> </ul> <p>&lt;検証計画の立案&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 予想や仮説を検証するための観察・実験等を計画できるように。</li> </ul>	<p><b>3 調べる</b> [体験活動]</p> <p>&lt;観察・実験&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童による意図的・目的的な活動となるように。</li> </ul> <p>&lt;結果の整理&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実験の装置や状況に依存しない、妥当な結果を出せるように。</li> </ul>
<p>問題は文末に「？」(疑問符)が付く文体になります</p>	<p>自分の予想や仮説をもとに計画を立てるので、意欲的になります</p>	<p>児童が意図や目的をもっていないと、観察・実験ではなく作業です</p>
<p><b>4 つきとめる</b> [言語活動]</p> <p>&lt;考察&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 結果を吟味し、予想や仮説の妥当性を検討できるように。</li> </ul> <p>&lt;結論の導出&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 結果から何が言えるのか(結論)を、児童がまとめられるように。</li> </ul>	<p><b>5 活かす</b> [言語活動・体験活動]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 得られた結論を他の場面に活かしたり、日常生活に当てはめて考えたりする活動を設定する。</li> </ul> <p>観察・実験は児童が結果を整理して考察することで、はじめて意味や価値をもちます。4～6の学習の時間を十分に確保しましょう</p>	<p><b>6 振り返る</b> [言語活動]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習を振り返り、分かったことや考えたこと、さらに調べたいことなどを表出できるように。</li> <li>・ 学んだことを、科学的な見方や考え方をを用いて、他者に説明する時間を設ける。</li> </ul>

## 3. 単元を通して科学的な見方や考え方を養うための展開例

### (1) 単元名

『てこの規則性』<小学校学習指導要領 第6学年A(3)>

### (2) 単元のねらい

生活に見られるてこについて興味・関心をもって追究する活動を通して、てこの規則性について推論する能力を育てるとともに、それらについての理解を図り、てこの規則性についての見方や考え方をもちこることができるようにする。

### (3) 科学的な見方や考え方を養うための指導のポイント(次項参照)

#### ア 単元を通して児童の問題意識が連続発展するよう構成する

この単元では、身の回りで見られる棒や実験用てこ、てこの働きを使った様々な道具を扱います。児童がそれらの物を別々の物としてではなく、共通の仕組みや働きがある物として捉えられるようにすることが大切です。そのためには、単元を通して児童の問題意識が連続し、発展するよう構成する必要があります。

#### イ 見つけた規則性をもとに追究したり、事象を説明したりする活動を設定する

実験用てこを使い、てこの規則性について調べた児童は、「左右でおもりの数とめもりをかけた数が等しくなるとき、水平につり合う」ということを見つけていきます。それをもとに、様々な場面でのつり合いについて、推論しながら調べられるようにします。右の写真は、めもりとは違う位置での左右のつり合いについて、左右で条件を揃えながら、調べている様子です。



写真3-1 第5時の様子

さらに、単元の最後に関連する事象を提示し、なぜこのような現象になるのかを説明し合う活動を設定することも有効です。右の図は、提示する例として、水道管の片側を曲げたときの現象を表しています。

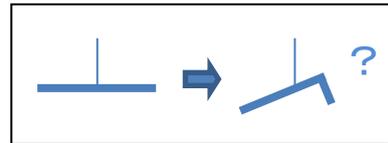


図3-2 第11時の提示物

(4) 単元の指導と評価の計画

過程	次	時	学習内容 (□は活動のきっかけ)	教師の支援・留意点	評価規準及び評価方法
出会う 見通す 調べる つきとめる 振り返る	第1次	第1・2時	<p>□ハンガーの左右にくつ下をつり下げたときの様子を観察する。</p> <p>第1次の問題</p> <p><b>棒が水平につり合うのは、どのようなきまりがあるのだろうか。</b></p> <p>○実験用でこで左右のおもりの数や位置を変え、水平につり合う時や傾きについて調べる。</p> <p>問題 <b>てこの左右に同じ重さのおもりをつり下げるとき、どのようにすれば水平につり合うのだろうか。</b></p> <p>○どのようにすればつり合うか予想する</p> <p>○実験の計画を立て、実験する。</p> <p>左右に同じ重さのおもりをつり下げ、つり合う時を調べる。</p> <p>結論 <b>同じ重さのおもりを、てこの左右で同じめもりにつり下げると、水平につり合う。</b></p> <p>○てんびんについて知り、わかったことやさらに調べたいことをまとめる。</p>	<p>◇水平になっているときと傾いているときの違いに注目できるようにする。</p> <p>◇おもりの数や位置を自由に換え、傾ける働きを体感させ、条件に目を向けて調べる必要性をもたせる。</p> <p>◇既習事項を基に予想を立てさせる。</p> <p>◇つり合わなかった時の傾きの様子についても、気づきをもつことができるようにする。</p>	<p>・棒がつり合う時に興味・関心を持ち、自ら規則性を調べようとしているか。【関・意・態】(発言分析・記述分析)</p> <p>・水平につり合った棒の左右に、支点から等距離に物をつけるして水平になった時、物の重さは等しいことを理解している。【知・理】(記述分析)</p>
			<p>問題 <b>てこの左右に重さの違うおもりをつり下げるとき、どのようにすれば水平につり合うのだろうか。</b></p> <p>○どのようにすればつり合わせられるか予想する。</p> <p>○実験の計画を立て、実験する。</p> <p>水平につり合うときの組み合わせを調べ、規則性を見つける。</p> <p>結論 <b>左右で(おもりの数)と(めもり)をかけた数が等しくなるようにおもりをつり下げると、てこが水平につり合う。</b></p> <p>○導き出した結論を確かめる。</p> <p>○わかったことやさらに調べたいことをまとめる。</p>	<p>◇シーソーなどの体験や既習事項をもとに、予想を立てさせる。</p> <p>◇左側に下げるおもりの数と位置を固定し、右側の数と位置を変えて調べるようにする。</p> <p>◇グループで左右のおもりの数とめもりの組み合わせを考え、確かめられるようにする。</p>	<p>・てこが水平になる時を定量的に調べ、記録している。【技】(行動観察・記録分析)</p> <p>・実験の結果と予想を照らし合わせて推論し、てこの規則性を表現している。【思・表】(発言分析・記述分析)</p>
			<p>第1次の結論</p> <p><b>・棒の左右で(おもりの重さ)と(支点からの距離)をかけた数が等しくなるようにおもりをつり下げると、水平につり合う。</b></p> <p><b>・(おもりの重さ)×(支点からの距離)は、おもりが棒を傾ける働きを表している。</b></p> <p>○第1次の学習を振り返り、わかったことやさらに調べたいことをまとめる。</p>	<p>◇見つけた規則性の意味を問い、棒を傾ける働きの大きさを意識付ける。</p> <p>◇左側の5のめもりに2つのおもりをつり下げているとき、右側に4つのおもりでつり合うかを問う。</p> <p>◇10gと20gの2種類のおもりを準備しておく。</p> <p>◇これまでの結果を基に、第1次の問題に対する結論を書くようにする。</p> <p>◇「学んだことを家の人に説明する」という家庭学習の課題を提示する。</p>	<p>・実験の結果と予想を照らし合わせて推論し、てこの規則性を表現している。【思・表】(発言分析・記述分析)</p> <p>・てこは左右のおもりの重さと支点からの距離の乗数が等しい時に水平になること、おもりの重さや位置を変えると傾ける働きが変わることを理解している。【知・理】(記述分析)</p>

過程	次	時	学習内容 (□は活動のきっかけ)	教師の支援・留意点	評価規準及び評価方法
出会う 見通す 調べる つぎとめる 振り返る	第2次	第6・7時 てこの働き	<p>□棒で重い物を持ち上げたときの様子を観察する。</p> <p>問題 重い物を小さい力で持ち上げたいとき、てこの規則性をどのように使ったらよいのだろうか。</p> <p>○てこを使って重い物を楽に持ち上げる方法を予想し、実験する。 力点や作用点の位置を変えて、手応えの違いを調べる。</p> <p>○結果をもとに、重い物を小さい力で持ち上げる方法についてまとめる。</p> <p>結論 てこは、力点を支点から遠ざけたり、作用点を支点に近づけたりすると、小さい力で重い物を持ち上げられるようになる。</p> <p>○第2次の学習を振り返り、わかったことやさらに調べたいことをまとめる。</p>	<p>◇棒を傾ける働きの大きさに注目できるようにする。</p> <p>◇変える条件と変えない条件を整理して実験できるように支援する。</p> <p>◇支点から力点までの距離を変えた時と、支点から作用点までの距離を変えた時の、それぞれの結果を合わせてまとめるよう、助言する。</p>	<p>・既習事項と関連させて、小さい力で持ち上げる方法を調べようとしている。 【思・表】 (発言分析・記述分析)</p> <p>・条件を制御しながら実験している。 【技】 (行動観察・記録分析)</p> <p>・力を加える位置や力の大きさを変えると、てこを傾ける働きが変わることを理解している。 【知・理】 (記述分析)</p>
出会う 見通す 調べる つぎとめる 活かす 振り返る	第3次	第8時 てこの利用	<p>□くぎぬきでくぎを抜いている様子を観察する。</p> <p>問題 くぎぬきなどの道具は、てこの働きをどのように利用しているのだろうか。</p> <p>○てこを使った道具を探し、しくみを調べる。</p> <p>○てこの働きを使った道具のしくみを説明するための資料を作成する。</p> <p>○てこの働きを使った道具のしくみを説明し合い、わかったことをまとめる。</p> <p>結論 ・くぎぬきは支点から作用点までの距離が短く、支点から力点までの距離が長くなっていて、小さい力でぬくことができる。 ・身の回りには、てこの働きを利用した道具があり、用途によって「くぎぬき型」「トング型」「せんぬき型」がある。</p> <p>○第3次の学習を振り返り、わかったことやさらに調べたいことをまとめる。</p>	<p>◇てこを傾ける働きと関連付けて観察できるようにする。</p> <p>◇はさみやパンばさみなどを提示し、見通しをもてるようにする。</p> <p>◇それぞれの道具について、支点、力点、作用点を明らかにするよう、助言する。</p> <p>◇てこの働きをもとに、それぞれの道具をどのように使うとよいのかについても考えられるようにする。</p>	<p>・てこの規則性に着目し、意欲的にてこを使った道具を見つけようとしている。 【関・意・態】 (発言分析・記述分析)</p> <p>・わかりやすく説明できるよう資料を作っている。 【思・表】 (発言分析・記述分析)</p> <p>・身の回りには、てこの規則性を利用した道具があることを理解している。 【知・理】 (記述分析)</p>
活かす 振り返る	学習のまとめ	第11時	<p>□水平につり合っている水道管と、つり下げたおもりの高さを変えられる実験用てこを観察する。</p> <p>問題 ・水平につり合っている水道管の片側を曲げると、どのようなになるだろうか。 ・実験用てこにつり下げているおもりの高さを変えると、どのようなになるだろうか。</p> <p>○結果を予想する。 ○結果を観察し、なぜこのような結果になるのかを考え、説明する。</p> <p>○単元の学習を振り返り、わかったことや考えたことをまとめ、発表する。</p>	<p>◇水道管はフレキシブル管を使用する。</p> <p>◇見た目の印象から多くの児童が結果とは違う予想をされると考えられる。これまでに導いた結論を振り返り、図をかいたり実験用てこを使ったりして説明し合えるようにする。</p> <p>◇「学んだことを家の人に説明する」という家庭学習の課題を提示する。</p>	<p>・てこの規則性について、自分の考えを表現している。 【思・表】 (発言分析・記述分析)</p>

※ この「単元の指導と評価の計画」は、小学校理科ワーキングの参加者の実践をもとに、再構成したものです。

## ◆ 外国語活動の授業づくりのポイント

### 1. 授業づくりの方向性

#### ●人と人をつなぐコミュニケーション活動の工夫

外国語活動の授業においては、外国語を通じて言語や文化について理解を深めるとともに、コミュニケーションの基盤である相互理解が深められるよう授業構成を工夫することが大切です。

#### ●学級担任の強みを生かす

外国語活動は指導者が英語が堪能であればよいというのではなく、他の教科同様に子ども理解や学級経営力が重要です。また、他の教科領域の内容を横断的に取り入れることができるのも担任の強みです。

#### ●小・中連携の視点を持つ

中学校の学習指導要領では、発信力を育むことが重視されるとともに、授業の中で自分の思いを伝えたり、考えたりする活動が必要とされています。こうした中学校での課題を理解した上で授業づくりをすることが、小・中連携の視点のひとつとなります。

### (1) 人と人をつなぐコミュニケーション活動の工夫

#### ○外国語活動のねらい

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。(学習指導要領)

この目標は次の3つの柱から成り立っており、これらを踏まえた活動を統合的に体験することで、中・高等学校での外国語の学習につながるコミュニケーションの素地を作ろうとするものです。

- 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めること
- 外国語を通じて、積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度を養うこと
- 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむこと

#### ○コミュニケーション能力の素地とは？

「小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」

イメージとしては、田畑でお米や野菜を育てるための土づくり、土を耕す段階にあたります。中学校の目標では「コミュニケーション能力の基礎を養う」としており、その土で作物を育てるといった段階につながっていきます。

【小学校】コミュニケーション能力の素地  
「興味・関心」「態度」「(音声・表現へ)の慣れ親しみ」



【中学校】コミュニケーション能力の基礎  
「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」



## ○授業づくりのポイント

指導にあたってはこうした学習指導要領における外国語活動の目標の柱を踏まえた活動を設定するとともに、コミュニケーションの基盤である相互理解が深められるよう「人と人をつなぐ」活動の工夫することが大切です。

### ① 先生と児童の活動から児童と児童の活動へ

指導者が一方的に知識を注入したり、指導者と子どもだけの活動で終わるのではなく、子ども相互の活動を取り入れることにより、ことばで人とかかわる楽しさや大切さを感じ取らせ、自尊感情や他者を思いやる感情を育む工夫をしましょう。



外国語活動教材「Hi, friends!」

### ② 友だちとの協力を通して相手意識のあるコミュニケーション活動へ

相手意識のある活動にすることにより、子どもが伝える内容に子ども自身の思いが盛り込まれ、まさに聞きたい話したい内容となります。また母語とは違い、普段は使わない外国語を使うことでコミュニケーションのハードルは高まります。どう伝えればよいかを自分で考えたり、友だちと協力したりすることでそのハードルを越えるような機会を設け、ことばを用いたコミュニケーションの楽しさや大切さを感じることができるようになります。

## (2) 学級担任の強みを生かす

### ○深い児童理解が欠かせない

学習指導要領には外国語活動の指導は学級担任又は外国語活動の担当が行うことが明記されています。子どもが聞きたくなる、言いたくなるような題材のもと、聞く・話す必然性のある、子どもの実態に合った活動を設定することができるからです。

外国語活動の指導は英語が堪能であればよいというものではなく、子ども理解や学級経営力が重要となります。

### ○他の教科領域の内容を横断的に取り入れる

「指導内容や活動については、児童の興味関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにする」 (小学校学習指導要領)

ほとんどの教科等を指導している学級担任は、他教科等でどのようなことを学習し、子どもたちがどのような題材、活動に興味を抱いているかを把握しています。このことはまさに、外国語活動を進める上でのポイントとなります。

## ○授業づくりのポイント

### ① 外国語を使おうとするモデルになる

授業の実施にあたっては、英語を扱うことへ不安感や負担感を感じる部分もあると思います。しかし、外国語のモデルはネイティブ・スピーカーや外国語に堪能な地域人材の支援、ICT機器の活用によって示すことができます。

学級担任は外国語のモデルではなく、外国語を使おうとするモデルになることを意識し、子どもたちのことを一番理解していることを活かして、外国語と子ども、子どもと子どもをつなぐ架け橋の役割を果たすことが大切です。

### ② 授業運営の主導権を握る

ネイティブ・スピーカーとのティームティーチングの指導では、英語をたくさん聞かせているのはネイティブ・スピーカーであったりしますが、学級担任は授業展開の主導権を握り、子どもの様子を見ながら活動を展開することが大切です。

また、そのためには高学年担当者にだけその指導を任せるのではなく、学校として外国語活動に取り組み、支援体制を作ることが大切です。

指導案検討	教材の作成
情報の共有	校内研究の推進 など

ALT との授業は  
互いの長所を  
生かした役割分  
担がポイント



### (3) 小中連携の視点を持つ

小学校の外国語活動では、児童に外国語によるコミュニケーションの楽しさを十分味わわせ、もっと聞きたい、話したい、そして外国語を書けるように、読めるようになりたいという期待感を抱かせて、中学校の外国語科に繋げていくことが望まれます。

### ○小中連携のポイント

外国語活動と中学校での外国語をつなぐためには小中連携が大切ですが、実効のあるものにするためには次の2点を踏まえることが必要です。

- |                                                                |
|----------------------------------------------------------------|
| ●何のための小中連携なのか（小中連携の目標の確認）<br>●小中学校での授業の実態・課題の共有（共通点の確認と相違点の尊重） |
|----------------------------------------------------------------|

### ① 共通点と相違点

外国語活動と中学校の外国語に共通するのはコミュニケーションを図ろうとする態度を大切にしていることです。

間違いを恐れず発信できる学習集団を作ることが大切であるとともに、言語活動に自信をもって取り組めるようステップを踏んで活動を設定する必要があります。また、活動の中に見えるそれぞれの子どもよさを具体的に価値付けてほめることで、コミュニケーションへの意欲を高めるとともに、自分自身への肯定感を高めることができます。

一方、相違点としては、外国語活動に比べ中学校の外国語では聞く、話すに加えて読む、書くという4領域において正確さと適切さが求められます。

こうしたことを意識して指導することで、互いの有用感を高め、相乗効果としてそれぞれの指導内容を深めることにつながります。

## ② 中学校の外国語の目標と課題を知る

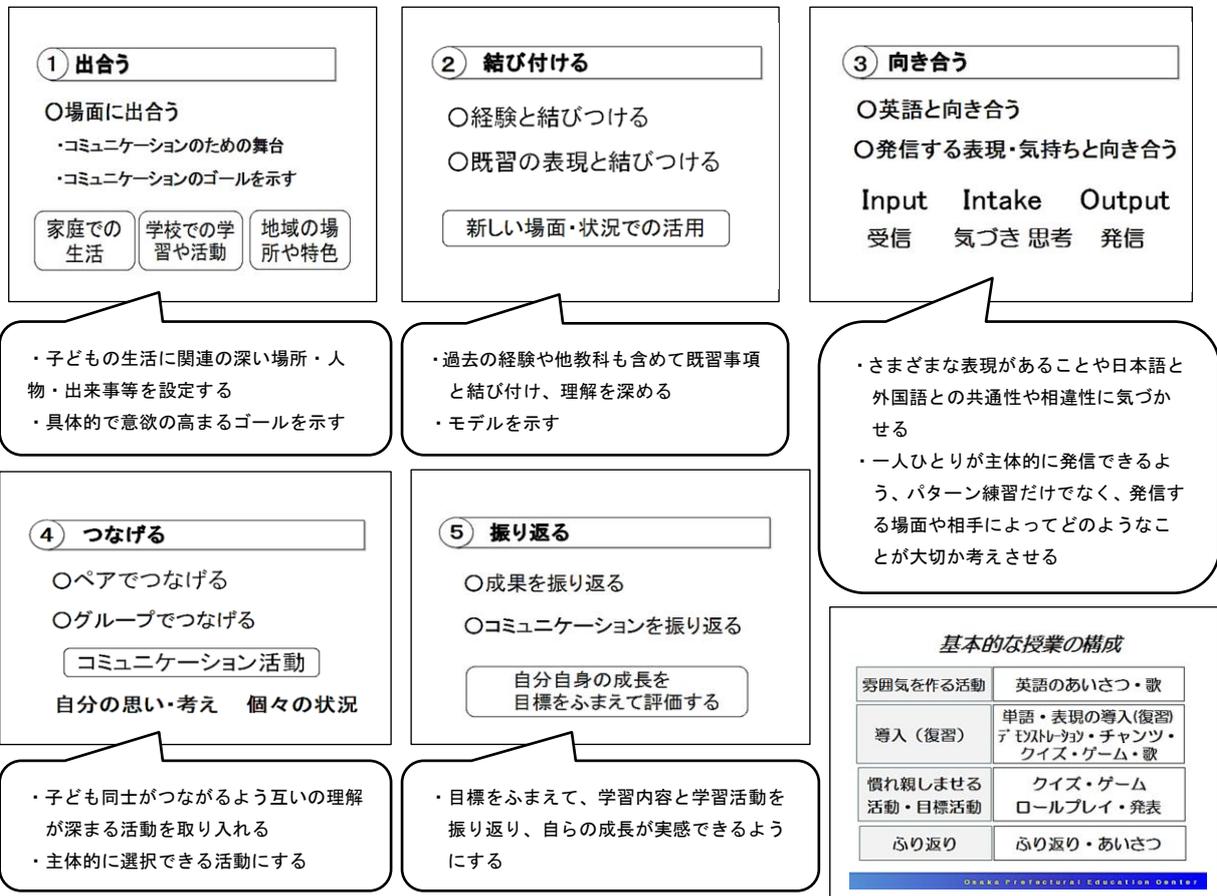
平成 24 年度に中学校学習指導要領が完全実施されました。外国語については「発信力」を育むことが重視されています。また、国立教育政策研究所が発表した『特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）調査結果』（平成 24 年 1 月）においては、次の 2 点が指導の改善方向としてしめされました。

- 実際に言語を使用してお互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を通して定着を図る。
- 生徒が思考・判断する場面を活動の中に取り入れる。

こうした中学校における外国語の課題や方向性を意識して、外国語活動の授業づくりをすることがカリキュラムの連携を進めることにつながります。

## 2. 外国語活動における「大阪の授業スタンダード」

### ●コミュニケーション能力の素地を養う授業構成の工夫



### (1) 出会う（コミュニケーションを引き出す場面・条件の設定）

子どもたちは様々な語彙や表現に出会います。その時にそれらの語彙や表現を聞いたり話したりする必然性があるような場面に出合わせることが大切です。

また、その場面を子どもにとって関連の深い場所や人物、出来事等にすることで、語彙や表現の意味を日本語を介さなくても推測することができ、コミュニケーション活動のゴールへの意欲が高まります。

## (2) 結び付ける（これまでの経験や既習事項を新しい場面に結び付ける）

子どもたちに新しい語彙や表現を使って、主体的に発信させるためには、これまでの経験や既習事項と結び付けて見通しを持たせることが大切です。その際、絵、写真、映像など視覚にうったえる教材やチャンツのようにリズムや音楽を活用することが学習意欲を高める上で有効です。



「道案内」の授業で場所を表す表現について、ピクチャーカードを使って指導



チャンツはCD等の音楽を使う以外にカスタネットやタンバリンでも指導できる



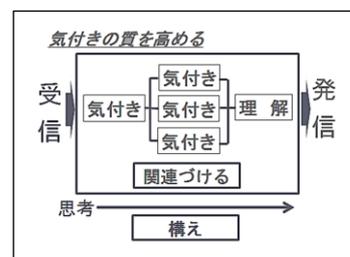
## (3) 向き合う

子どもたちが、相手意識を持って活動に取り組めるように指導することで、英語にもその状況や場面によって様々な語彙や表現があること、また日本語との共通点や違いに気がきます。こうした指導の工夫によって発信しようとする気持ちに主体的に向き合わせる事が大切です。

## (4) つなげる

ペアやグループの学習形態を活用して、子どもどうしが相互理解を深め、互いの考えや表現活動を高めることができるように工夫することが大切です。

その際、発信する必然性のある場面を再現することで、活動が活性化します。また、パターン化されたものだけでなく選択できる題材にすることで主体的な発信力を育むことができます。



さまざまな気付きを関連づけ、理解することにより発信する力が高まる

### ●アクティビティについて

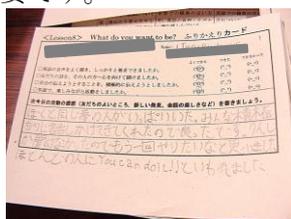
- ・単元目標にあった活動内容にする
  - ・ルール、段取り、ポイントを明確にする
  - ・適切な学習形態を選ぶ
- 全体学習、一人学習、ペア学習、グループ学習



活動の目的や内容にあった課題設定が大切

## (5) 振り返る

学習活動や学習内容を振り返ることで、子どもたちが自分自身や仲間の成長を確認できるような工夫をすることが大切です。振り返りシートを活用する際には、目標と指導内容と評価の観点を踏まえて項目を設定することが必要です。



観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
趣旨	コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。

目標と指導内容と評価の観点を踏まえることが大切

次の活動への意欲を高めるふりかえりカード

◆ 国語の授業づくりのポイント

1. 授業づくりの方向性

(1) 付けたい力を明確に意識する

国語科では、実生活に生きて働く言葉の力を育むことを大切にしています。

どんな言葉の力を育む必要があるのかを学習指導要領の指導事項から取り上げて、「付けたい力」として明確に意識して指導することが大切です。

学習指導要領の指導事項を  
ふまえる

子どもたちの課題や実態、発達段階や年間指導計画、  
教材の価値や特性などを参考にする

これらの項目をふまえ、指導者として、単元終了時において子どもたちにどんな力を付けてほしいのかイメージする必要があります。

(2) 付けたい力を付けるのにふさわしい言語活動を設定する

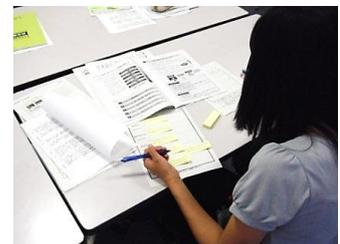
当該単元で重点的に指導すべき指導事項を「付けたい力」として確定し、その「付けたい力」を付けるのにふさわしい言語活動を設定します。この言語活動については「学習指導要領解説国語編」で次のように説明されています。

「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、内容の(2)に社会生活に必要とされる発表、案内、報告、編集、鑑賞、批評などの言語活動を具体的に例示している。

言語活動を通して課題を探究する能力を身に付けること、社会生活で必要とされる言語活動を例示していることがポイントです。単元を貫く言語活動を設定し、その活動を通して明確にした付けたい力を付けるということが大切です。言語活動の設定には学習指導要領の内容の(2)に示す言語活動例をもとにすることが考えられます。例えば、第3学年〔B 書くこと〕では「ア 関心ある事柄について批評する文章を書くこと」「イ 目的に応じて様々な文章などを集め、工夫して編集すること」が例示されています。

(3) 付けたい力を付けるための指導計画を作成する

前述したように、設定した言語活動が、課題を探究していく能力を身に付けるために課題を解決していく過程となるように、具体的な指導計画を立てていくことが大切です。子どもたちが主体的に課題を解決していく学習過程については、『大阪の授業スタンダード』が示す5つの段階が参考になります。課題解決の過程で「付けたい力」を付けることを意識することが大切です。



出会う

課題を自分の問題として受け止めさせ学習意欲を喚起する。

結び付ける

学習した表現を活用するなど既習の知識が使えないかを考えさせる。

向き合う

「付けたい力」を付けるのにふさわしい言語活動を取り入れ、課題に取り組ませる。

つなげる

ペアやグループ交流などの授業形態を効果的に取り入れ、考えをつなぎ深める。

振り返る

目標に照らし、自分の学びを振り返らせる。

## ◆ 中学校国語における「大阪の授業スタンダード」

### 1. 子どもたちが主体的に考えられる課題の提示

#### ●課題を自分の問題として受け止めさせ、学習意欲を喚起する

教材や本時の課題との出会いを大切にすることで、子どもたちの「やってみよう」「考えてみよう」という学びに対する意欲を高め、子どもたちが主体的に学習に取り組む授業を作っていきます。

子どもたちが主体的に学習に取り組んでいくためには、教材や学習課題との出会いの場面はとても大切です。子どもたちの興味や関心がわくような工夫を取り入れたり、学習のねらいを達成させ得る学習課題の提示をしたりするなど、子どもの情意的側面に刺激を与えて学びへの意欲につながるような場面にします。

#### 出会いを大切にするために…

- ・単元はじめの授業では、まず教師の範読がよいか、子どもの音読がよいかを考えてみる。
- ・「書くこと」の単元において、言語活動を提示することで学習の見通しを持てるようにする。
- ・文学的教材の題名について、既習の教材の題名から内容を想起させ、これから学ぶ教材の内容を想像させてみる。
- ・子どもたちの問題意識を高めるために、本時の導入部分で教師が作成した文例や話型を提示することで、興味・関心を持たせ、検討しようとする課題を意識させる。
- ・本時の目標を明確に示し、学習の見通しを持たせ、主体的に学習に取り組ませるようにする。 など

#### 取組事例 1

### 思いを伝えるスピーチ～私の宝物～

#### 中学校ワーキング(泉北・泉南地区)の模擬授業より



中学校国語ワーキング(泉北・泉南地区)では、子どもたちの実態から「話す・聞く力」を付けたいと考え、『思いを伝えるスピーチ』という単元を設定し、自分の宝物を紹介する学習の計画を立てました。聞き手により伝わるような話し方について子どもが主体的に学習できるような授業の導入(出会い)を、模擬授業を行い検証しました。

【本時のめあて】 原稿を読むだけでなく、聞き手に伝わるような工夫を考え、スピーチをしていこう。

#### 【模擬授業で取り入れた出会いの工夫】

- ・指導者による異なるスピーチの例を聞き、違いを見つけさせる。
- ・よい例とよくない例とを提示することで、聞き手により伝わる話し方の工夫を子どもが自ら見つけ出せるようにする。
- ・指導者が例示することにより、子どもの興味や関心を持たせることにつなげる。

指導者が提示した比較できるような例から、本時に学ばせたい内容に気づかせるような教材との出会いを工夫することで、子どもたちは学習課題に興味を持ち、意欲的に取り組むことにつながります。

## 2. 子どもたちが課題の解決に向けた見通しをもつ場の設定

### ●学習した表現を活用するなど、既習の知識が使えるかを考えさせる

これまで経験したり学習したりしたことの中で活用できることを考えたり、取り組む学習全体の流れをつかんだりします。

例えば、作品の良さを伝えるための鑑賞文を書く際には、読者に伝わりやすくするために具体的な根拠や事例を挙げることが必要であるといった既習内容を想起させます。また、書いた鑑賞文を推敲する際には、これまでの推敲の学習を思い出させ、注意して読み返す部分を考えさせます。

子どもたちが既習の知識や技能を活用して自力で課題解決していくために、表現の型を教室や黒板に提示しておいたり、ワークシートに登場人物や出来事、場面展開などといった作品を読む観点を記していくことも効果的です。

## 3. 言語活動を通して目標を達成していく

### ●「付けたい力」を付けるのにふさわしい言語活動を取り入れ、課題を解決させる

「付けたい力」を育み、目標を達成するのにふさわしい言語活動を、学習活動に位置付けるようにします。言語活動を通して課題を解決していくことで、目標を達成していくこととなります。

#### 取組事例 2

### 本の帯作りを通して自分の考えを持つ

#### 中学校ワーキング(三島地区)の取組

中学校国語ワーキング(三島地区)では、『旅への思いー芭蕉とおくのほそ道』(教育出版 3年)を教材として扱い、子どもたちに、松尾芭蕉の旅への思いが表現されていることを読み取り、読みとったことを本の帯を作って表現していく言語活動を取り入れた学習を考えました。

#### 【付けたい力…読むこと 指導事項Ⅰ】

文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見を持つこと

#### 【単元の目標】

「おくのほそ道」を読み、表現の特徴や、作者松尾芭蕉の旅への思いや人生に対するものの見方や感じ方を読み取り、説明する。

このように「本の帯をつくる」という言語活動を設定し、本の帯に表現するために、読み取ったことを書きながら、自分の意見を持つという「付けたい力」を育てていくようにします。

#### 【指導のポイント】

- ①本単元のまとめとして「本の帯づくり」を設定する。
- ②本の帯に表現するために、松尾芭蕉の人生観や旅への思いをていねいに読み取らせる。
- ③読み取った内容を理解し、自分の考えを取り入れながら作品の特徴をまとめさせる。
- ④松尾芭蕉の俳句や気持ちを入れて「おくのほそ道」に適した帯を考えさせる。
- ⑤考えたことをもとに本の帯を作らせる。
- ⑥互いに評価しあって、旅への思いや人生に対する考えを深めさせる。
- ⑦本の帯を完成させる。



## 4. 友だちとの考えをつなぎ、考えを深める活動の設定

### ●ペアやグループなどの授業形態を効果的に取り入れ、考えをつなぎ深める

つなげる段階では、子どもたちの考えをお互いに伝え合い、考えを共有するために対話やグループ交流、全体交流などを目的に応じて取り入れることが大切です。

考えをつなぎ、考えを深める活動では、子どもたちが何のために、どんな交流をするのかを意識できるようにすることが大切です。

#### 【考えをつなぐ際の指導のポイント】

- 友だちの考えを大切に聴くことを意識させる
- 友だちの考えのよさを見つけながら聴かせる
- 自分の考えと友だちの考えとを比較して聴かせる
- 説明の不十分さを補足説明させたり、自分の言葉で言い換えさせる
- 友だちの話には感想や思ったことを伝えるようにさせる

#### 【交流における指導の留意点】

- 発表や発言の型を示し身に付けさせる
- 司会・進行の仕方など既習の知識を生かして役割分担させる
- 話し合いの目的と出口を明確にし意識して取り組めるようにする
- 交流の後、再度自分の考えをまとめさせる

## 5. 子どもたちが自分についての力を振り返り、言葉で表す場の設定

### ●目標に照らし、自分の学びを振り返らせる

めあてをふまえて、わかったことや自分が成長したと思うことなどを、ノートやワークシートに書かせて自分の学びを振り返らせます。書くだけではなく、振り返ったことを交流することも取り入れることで、お互いの学びについて共有することもできます。

(振り返りの観点：本時のめあてをふまえて、分かったこと・考えたこと・工夫したこと

自分が成長したと思うこと・友だちから学んだこと・疑問に思ったこと など)

指導者として子どもたちに付けたい力があったかどうかを適切に評価することが大切です。例えば、ノートの記述や交流をしている子どもたちの姿、プレゼンテーションの発表内容などから評価するなど、具体的な方法で評価します。その評価をもとに授業で取り入れた学習過程や指導方法の工夫などが有効であったかを検証することは、授業の改善をしていくことにもつながります。

また、授業参観シートなどを活用し、お互いの授業を参観して、子どもたちの活動の様子や、指導者の発問や指示などについて話し合い、授業づくりに生かしていくことも大切です。

#### 国語科の評価について

活動を通して身に付けさせたい力を明確にして、その力が付いたかどうかを適切に評価することが大切です。※評価の観点を絞ることがポイント。

- 指導事項に基づいて具体的な評価規準を設定します。(どの場面で・何をもちて評価するか・評価をどう生かすか)
- 単元の評価の観点の基本は3観点。
  - ①国語への関心・意欲・態度
  - ②「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」のうち1領域に絞って設定したもの
  - ③言語についての知識・理解・技能
- 1単元1領域が現実的。1時間の評価規準は1～2つ設定する。

評価規準の設定や評価方法については国立教育政策研究所作成の資料等が参考になります。

◆ 数学の授業づくりのポイント

1. 授業づくりの方向性

● 付けたい力を明確にする

「目標」—「指導」—「評価」を意識し、生徒に付けたい力を明確にします。学習指導要領の目標に照らした内容項目を指導、具体的な到達ポイントを定めた規準で授業を評価します。その際、学習内容の定着を確認し、生徒の情意面に係る振り返りを、次の授業につなげることが大切です。

【学習指導案における「目標」と「学習評価」の設定例】

- (1) 学習指導案は、指導と評価の一体化を意識して、「目標」—「指導」—「評価」の流れをわかりやすく示す必要があります。そのためには、1 単位時間の授業だけではなく、単元を通しての指導計画を示さねばなりません。
- (2) まず、学習指導要領の「各学年の目標」や「内容」から、単元の目標を明確にします（教材観）。次に子どもたちの現状と課題を見据えた上（生徒観）で、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」から、指導と評価の計画を立てます（指導観）。
- (3) 学習指導案における学習評価の設定は、以下①～④の手順で具体化します。

① 単元の評価規準

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（国立教育政策研究所・平成23年11月）より4観点で設定します。

③ 本時の評価規準

1 単位時間の評価規準は 2 観点程度が適当です。  
技能 方程式を異なる方法で解くことができる。  
知識・理解 二次方程式の解法を理解している。

本時の目標と学習活動

**【本時の目標】**  
異なる方法を使って二次方程式を解き、同じ解が得られることを確認する。

①  $x^2+2x-8=0$  が  $(x+4)(x-2)=0$  となる理由  
②  $(x+4)(x-2)=0$  が  $x=-4, x=2$  となる理由をペアで説明しあう。

$x^2+2x-5=0$  を 2 通りの方法で解き、同じ解になることを確認する

◎処理のポイント  
「ルート内の処理」「約分」

$x^2+2x-8=0$ （因数分解可能な式）を解の公式でも解き、二次方程式の解の公式や解そのものの意味理解を深める。

② 単元の指導と評価の計画

「単元の評価規準」を、1 単位時間の授業の指導内容と関連付けます。

④ 本時の展開

「本時の評価規準」を指導場面と関連付けます。評価方法（ノート、発表、観察）を明記します。

◆『中学校数学 第3学年 A 数と式 (3) 二次方程式』の指導案の一例

## ●課題を焦点化する

「学力・学習状況調査」を活用して、学力の課題を焦点化します。調査問題からは経年比較や解答類型を利用して課題を浮き彫りにし、生徒質問紙からは生徒の「学習への意識」に関する傾向を探ります。分析結果から、「わかっていること」や「できていること」を改めて人に伝えたり、順序立てて説明する力を育てる授業が求められています。

### 調査問題から見える「一元一次方程式の課題」

(数値は府平均。○おおむね満足 ●大いに課題あり)

- 単に方程式を解く問題では 78.6% (H19,20 平均)
- △方程式を立てる問題では 57.5% (H20)
- 解の適否を判断する問題では 45.6% (H24)
- 立式の際に注目する数量を問われると 30.8% (H21)

#### 【A数と式】2通りに表せる数量に着目すること 中学校数学

24年度 A3(4) 正答率 45.6%

**【解答】**

① 兄が出発してからx分後に妹に追いつくとすると、妹に追いつくまでに兄が自転車を進む道のりは220x m、兄に追いつくまでに妹が進む道のりは70(15+x) mを表すことができる。

これらの道のりは等しいので、 $220x = 70(15+x)$   
この方程式を解くと、 $220x = 1050 + 70x$   
 $150x = 1050$   
 $x = 7$

x = 7のとき、つくった方程式の左辺と右辺の値は1540となり等しいので、x = 7は方程式の解である。

② 兄が出発してから7分後に兄と妹が進む道のり1540mは、家から駅までの道のり1800mより短いから、兄は妹が駅に着く前に追いつくことができる。

よって、兄が妹に追いつくのは兄が出発してから7分後である。

正答率は「大阪府公立」

解答の流れに沿って、課題(授業の弱点)を浮き彫りにする。

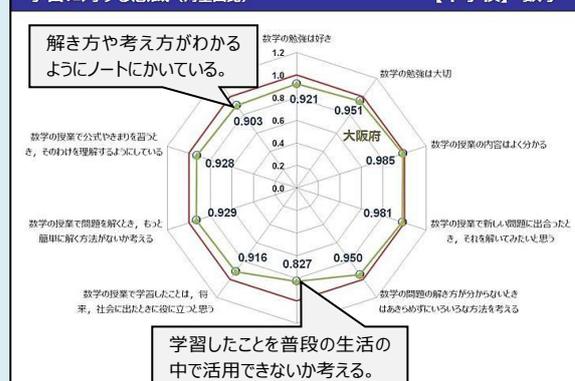
- ◆求める数量を文字に置く H21 正答率 30.8%
- ◆数量に注目する H20 正答率 57.5%
- ◆方程式を立てる H19-20 正答率 78.6%
- ◆解の適否の判断 H24 正答率 45.6%

### 質問紙調査から見える「学習に対する意識」

(数値は対全国比。学習への意識付けや動機付けが課題)

- ・生徒質問紙の項目より、数学の「学習に対する意識」をレーダーチャートで表したグラフ。
- ・特に「実生活への活用」や「ノート指導」に関する項目の数値が低い傾向にある。

#### 平成24年度 全国学力・学習状況調査(中学生質問紙より) 【中学校】 数学



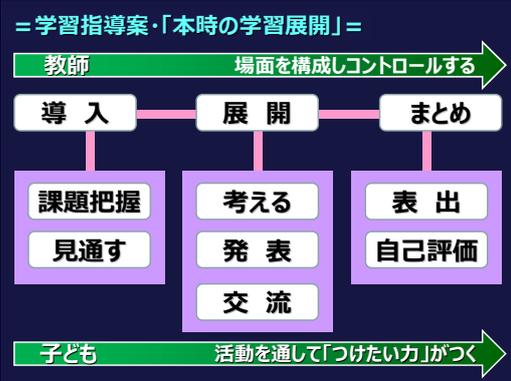
これらの結果に自校の結果を重ねることで、学力や意識の課題を焦点化できます。特に質問紙調査を全学年に広げ、学校全体の傾向を分析することで、授業改善に資する資料を作成することができます。

## ●授業場면을構成する

単元を通して、また1単位時間の中で、数学的活動を取り入れた授業場면을構成します。「具体物を操作する」、「式・表・図・グラフなどを用いて表現する」、「自分の考えを分かりやすく説明する」、「数学的な表現を意識して発表をする」などの活動を充実させることが大切です。

### 授業の場面構成のポイントは「展開」にある

- 導入《十分な動機付けのために》→ 課題把握/見通す
  - ・ねらいが達成できる・身近な素材である・多様な考えが出せる
  - ・既習内容を活用できる
- 展開《数学的活動を重視する》→ 考える/発表/交流
  - ・明確な指示や発問・活動時間や学習具、ノート指導の工夫
  - ・個別支援の手立て
  - ※思考力、判断力、表現力、言語に関する能力、学習意欲や規律を育成する
- まとめ《学習の効果測定のために》→ 表出/自己評価
  - ・学習した結果を自分なりの方法で表出
  - ・学習を振り返り次の学習につなげる



授業の中心に当たる「展開」で、具体物を用いた、操作を伴う数学的活動を取り入れることにより、そこへ至る「導入」や活動後の「まとめ」の内容が変わる。指導者は場면을構成しコントロールする力が求められる。

## 2. 中学校数学における「大阪の授業スタンダード」

### ● 学習意欲を高める数学的活動の場面設定の工夫

- ・ 数学的活動を取り入れた授業場面を構成します。
- ・ 言語活動を通して望ましい学習集団を育成します。
- ・ 具体物の操作を通して、課題の本質に迫る活動を取り入れます。
- ・ 課題の提示や解決の手段として、ICT 機器を効果的に導入します。
- ・ グループ活動では小黒板やホワイトボードなどを活用し、発表につなげます。
- ・ 自分の言葉でまとめる形式のワークシートを準備し、思考力や表現力をはぐくみます。



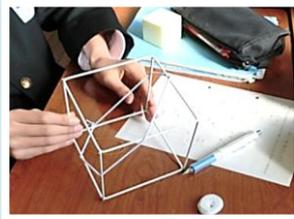
#### ◆ 出会う 《ICT》

動画で導入（二次関数のグラフ）  
→ 新幹線の加速度運動のVTR



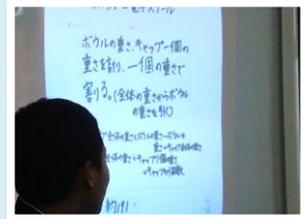
#### ◆ 向き合う 《具体物》

具体物の操作（立方体の切断面）  
→ 立方体の枠に輪ゴムをかける



#### ◆ つなげる 《ICT》

自分の言葉で発表（比例の実験）  
→ 書画カメラでノートを映し出す



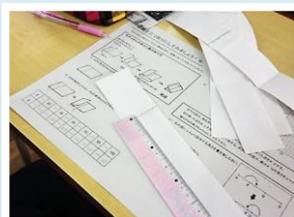
#### ◆ 結び付ける 《ノート》

学び方を学ばせる（円錐の表面積）  
→ 既習事項を振り返るノートづくり



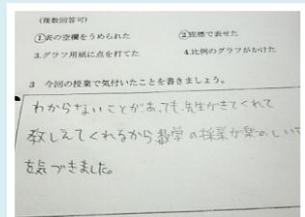
#### ◆ 向き合う 《題材》

具体物の操作（入試問題に挑戦）  
→ 平成23年度後期入試・大問3



#### ◆ 振り返る 《プリント》

認知面と情意面で振り返る（座標）  
→ 「表をうめて」「座標で表せた」とある



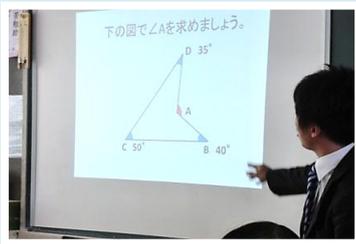
## ●数学の目標にかなう言語活動の在り方

学習指導要領では、各教科・領域における言語活動例として、数学では「数学的な表現を用いて、根拠を明らかにして筋道立てて説明し合う活動」とあります。ただし、それは教科の目標を達成するための手段であって言語活動そのものが目的ではありません。ここで言う「数学的な表現」とは、式や表やグラフ、図などを用いたり、適切な数学用語を使って表現することを意味します。授業では、多様な考え方をさせた後に、それらを比較検討したり、観点を定めて論議をさせることが重要です。

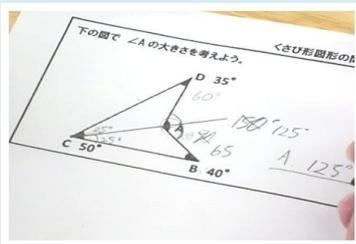
### 2年「凹みのある四角形の角度を求める」

- ・凹みのある四角形の1つの角度を求める。
- ・三角形の内角と外角の性質を使って説明をする。
- ・補助線のひき方で数種類の考え方があることに気付く。

**出会う** スライドで課題を提示する



**向き合う** 自分の考えを記録する



**つなげる** グループで互いの考えを交流する



**つなげる** 既習事項と結び付けて論議する



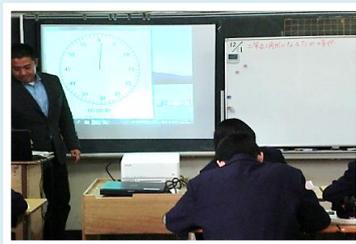
### 2年「二等辺三角形になるための条件」

- ・紙テープを折り返して重なる部分の図形に注目する。
- ・三角形の3つの角のうち2つが等しくなることに気付く。
- ・平行線における錯角の性質を使って説明をする。

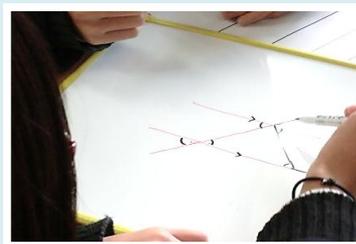
**出会う** 具体物を操作して課題を把握する



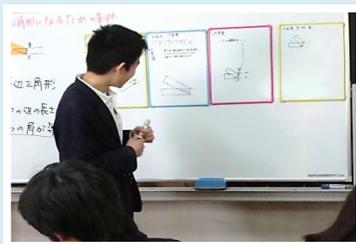
**向き合う** ひとりで考える（画面で計時）



**つなげる** ホワイトボードを用いて交流する



**つなげる** 考え方を全体で比較検討する



## ◆ 中学校理科の授業づくりのポイント

### 1. 理科の目標に基づく授業で大切にすべき内容

#### ●自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察・実験などを行うこと

- ・自然の事物・現象に進んでかかわることにより、生徒が主体的に疑問を見つけ、自然についての理解を深める中で新たな疑問を見いださせることが大切です。
- ・生徒の知的好奇心を育て、体験の大切さや日常生活や社会における科学の有用性を実感させましょう。
- ・観察・実験の際には、何のために行うのか、そのような結果が予想されるかを考えさせることが大切です。

#### ●科学的に探究する能力の基礎と態度を育てること

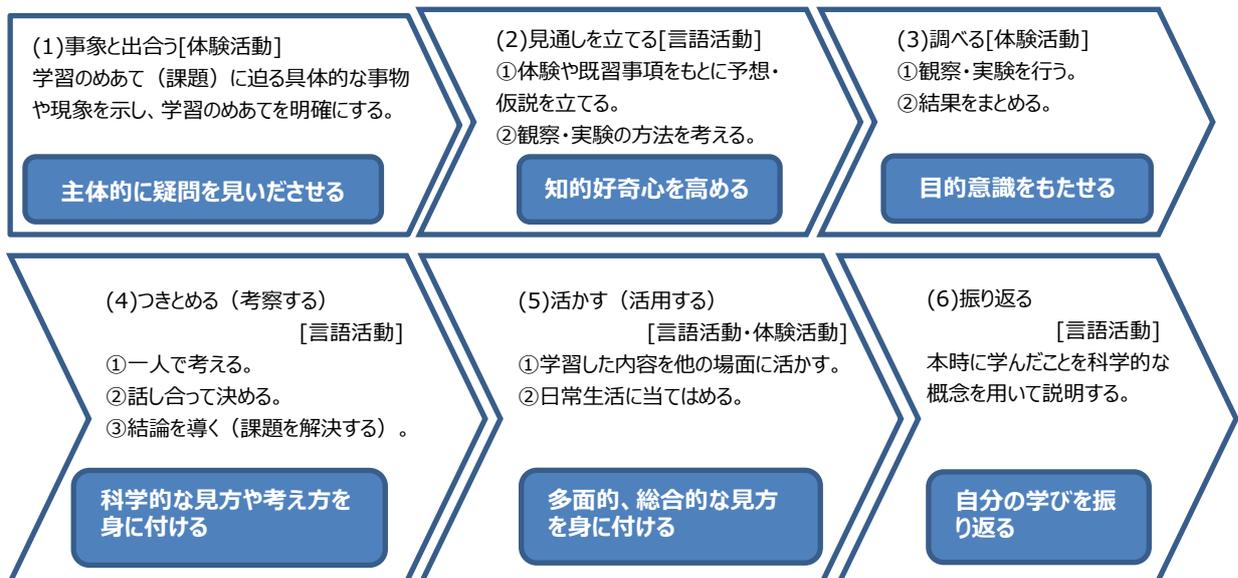
- ・観察・実験の計画を立てて、工夫して行わせることが大切です。
- ・観察・実験の結果を分かりやすく、表やグラフ、モデル等を用いて整理し、レポートを作成し発表させて、思考力や表現力などを養いましょう。
- ・結果を予想や仮説と関係づけながら、分析して解釈し、考察を言語化し表現することが必要です。

#### ●自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養うこと

- ・日常生活や社会とのかかわりの中で、科学を学ぶ楽しさや有用性を実感させます。
- ・観察・実験から得られた事実を客観的にとらえ、科学的な知識や概念を用いて合理的に判断するとともに、多面的、総合的な見方を身に付け、日常生活や社会で活用できるようにすることが大切です。
- ・人間が自然と調和しながら持続可能な社会をつくっていくため、身の回りの事象から地球規模の環境までを視野に入れて、科学的な根拠に基づいて賢明な意思決定ができるような力を身に付けさせましょう。

### 2. 中学校理科における「大阪の授業スタンダード」

- 理科の授業（1単位時間、あるいは1単元）を、次の6つの過程から構成することで、理科の目標を達成することができます。



### 3. 中学校 理科 授業展開例 中学校第2学年「酸化」

－ 主として問題を見だし観察・実験を計画する学習活動 －

#### 【単元名・目標】 酸素と結び付く変化（酸化）

化学変化についての観察、実験を通して、化合、分解における物質の変化やその量的な関係について理解させるとともに、これらの事象・現象を原子や分子のモデルと関連付けてみる見方や考え方を養う。

- 事象** マッチ1本でスチールウール（鉄）に火をつけよう。
1. 上皿てんびんの左右の皿に同じ大きさのアルミニウム箔をのせる。
  2. 左に1gの分銅を、右にほぐしたスチールウールをのせ、釣り合わせる。
  3. マッチでスチールウールに火をつける。
  4. 花火のように火が広がり、質量が増加した。

**課題** スチールウール（鉄）は燃えて、別の物質になったのだろうか？

- 仮説** A 別の物質になった。（理由：鉄のままなら質量は増加しない。色が黒くなったから）  
B 鉄のままである。（理由：黒くなったり、質量が増加したのはススがついたから）

**計画** 燃焼後の物質が鉄であるかないかを調べる実験方法を考えよう。

調べる方法	結果の見通し（鉄ならば）	結果	燃焼前（鉄）	燃焼後
電流が流れるか調べる	電流が流れる		電流が流れる	電流は流れない
磁石を近づける	磁石に引き寄せられる		引き寄せられる	引き寄せられる
うすい塩酸に入れる	気体（水素）が発生する		気体が発生する	少し気体が発生する
手触り	変化はない		弾力がある	もろく、くずれる

**考察** 燃焼後の物質も磁石に引き寄せられるので、鉄が残っていると考えられる。しかし、手触りも変わっており、電流も流れないので、燃焼後は、表面が鉄以外の物質に変わったと考えられる。

**結論** スチールウール（鉄）を燃やすと、鉄でない物質が生成し、内部に鉄が残った。

**課題** 酸素中でスチールウール（鉄）を燃焼させると、完全に鉄以外の物質に変えることができるのだろうか。

**調べる方法と結果** 右表参照

**考察** 電流が流れず、うすい塩酸に入れても気体が発生しなかったので、内部まで鉄でない物質に変化したと考えられる。しかし、磁石に引き寄せられるのが不思議だ。

調べる方法	加熱後（酸素中）の結果
電流が流れるか調べる	電流は流れない
磁石を近づける	引き寄せられる
うすい塩酸に入れる	気体は発生しない

**説明** 小学校では、磁石に引き寄せられる物質は鉄のみだと学習してきていますが、磁石に引き寄せられる物質は、鉄以外にもニッケルや酸化鉄などがあります。

**発問** スチールウール（鉄）は燃焼後、何という物質になったのでしょうか。質量の変化を基に考えてみましょう。

**結論** スチールウールは酸素中では激しく燃え、燃焼後質量が増加したので、鉄が酸素と化合して酸化鉄という別の物質になったと考えられる。鉄 + 酸素 → 酸化鉄 という式で表せる。

**振り返り**

スチールウール（鉄）を燃やすと、酸素と化合して酸化鉄ができると分かった。酸化鉄は、鉄と違って電流が流れず、うすい塩酸と反応しないが、磁石には引き寄せられることを知った。

**宿題**

鉄と硫黄の混合物を加熱したときの化学変化と、鉄が燃焼（酸素と結びつく）したときの化学変化について、共通点と相違点をまとめよう。

《解説》酸化鉄には  $\text{FeO}$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ （赤さび）、 $\text{Fe}_3\text{O}_4$ （黒さび、磁鉄鉱）などがあり、赤さびは磁性をもたないが、黒さびには磁性がある。スチールウールの燃焼でできた物質は黒さびを主成分とする。

#### 4. 理科の学習過程と評価の観点 —理科の授業づくりの基本— （小・中学校共通）

事象と出会う	<b>事象</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>身近な日常生活や自然の中から、単元や本時のねらいを達成させ得る事物や現象を取り上げる。</li> <li>感動や驚き、不思議さなど、子どもの気付きや疑問に結びつく教材を提示する。</li> <li>子どもの気付きや疑問を学習の課題に取り上げる。</li> </ul>	<b>関心 意欲 態度</b>
見通しを立てる	<b>課題</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>予想される答えを仮説として設定させる（子どもの考えを顕在化させる）。</li> <li>仮説は単なる当てずっぽうではなく、後の観察や実験で確かめることを想定したもので、「〇〇だから△△になったのではないか」というように、根拠も併せて予想させる。</li> <li>仮説に基づいて観察や実験の方法と結果の見通しをもたせ、観察や実験の計画を立てさせる。</li> </ul>	<b>思考 表現</b>
調べる	<b>計画</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>計画に従って、観察や実験の準備をさせる。</li> <li>使用する器具や用具、薬品の基本的な取り扱いや安全上配慮する点については、事前に指導を行う。</li> <li>視点を明確にして、観察や実験を行わせる。</li> <li>結果は、観察や実験から分かる事実のみを記すように指導する。</li> <li>表やグラフなどに整理させる。</li> </ul>	<b>技能</b>
つぎとめる	<b>結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>各自がまとめた結果を発表させ、共通点や相違点を見つけさせる。</li> <li>仮説を基に、観察や実験の結果を分析し、解釈する。</li> <li>子どもに揺さぶりをかけて思考させ、発言を促し、それらを繋ぎながら核心に迫る。</li> <li>子ども個々の考察を発表させ交流させて、結論に導く。</li> <li>科学的根拠として明らかになったことを、自分の言葉でまとめさせる。</li> </ul>	<b>思考 表現</b>
活かす	<b>結論</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>観察や実験から得られた結論を他の場面に活かしたり、日常生活に当てはめて考えたりして、知識や理解を確かなものにする。</li> <li>異なる事象についても同じことが言えるのか、予想を立てさせ、観察や実験を行う。</li> <li>場面を変えて、いろいろな実験を行い、学習内容の定着を図る。</li> </ul>	<b>思考 表現</b>  <b>知識 理解</b>
振り返る	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習を振り返って、「それなら〇〇も同じようになるかな。」「△△の場合はどうなるだろう。」など、新たな疑問や関心を生み出し、子どもの探究的な活動につながるよう配慮する。</li> <li>子どもの探究心を受け止められるような場の設定を行う。（自由研究など）</li> </ul>	<b>関心 意欲 態度</b>

※ この学習過程は、決して固定的なものではなく、課題や内容、特徴、子どもの発達段階等に応じて、ある部分を重点的に扱ったり適宜省略するといった工夫が必要ですが、この過程を通して問題解決の能力や態度を育成し、科学的な見方・考え方を身に付けさせることが大切です。

## ◆外国語科(英語科)の授業づくりのポイント

### 1. 授業づくりの方向性

#### ●コミュニケーションへの積極的な態度を育む

積極的に自分の考えを相手に伝えようとしたり、相手の考えを理解しようとしたりするなどのコミュニケーションを図ろうとする態度を普段の授業において育むことが大切です。

#### ●4技能をバランスよく育成する

「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4つの技能を育成するため、単に外国語の文法規則や語彙などについての知識を身に付けさせるだけでなく、実際のコミュニケーションの場面での活用を設定するとともに、定着を図るために繰り返し学習することが必要です。

#### ●小学校外国語活動となめらかな接続の視点を持つ

小学校外国語活動の目標や課題を理解し、小学校で活動した内容を中学校の授業において活用することも小学校外国語活動と中学校外国語科の接続を考えた授業づくりでは大切です。

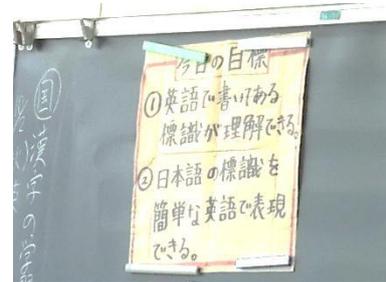
### 2. 外国語科における「大阪の授業スタンダード」

#### (1) 到達目標からの授業づくり

出会う

#### ○生徒が今日の授業で、何をどう、どれくらいがんばればいいのかわかっていますか？

- 生徒にどのような力を付けたいのかを明確にする。
- 単元終了時の目標、学期末の目標、学年末の目標、卒業時の目標を担当教員で共有する。
- そのために今どのようなことを、どのように指導するのかを、バックワードデザイン（ゴールから順に、段階を逆に追って指導内容を検討していく方法）で考える。
- さらに生徒に対しても目標をもたせ、それに向けてどのような学習をすればいいのかを考えさせる。



目標の提示例

#### ○生徒が主体となる授業のために

- 1時間ごとの具体的な目標（今日の授業でどのような力を付けるか）を生徒と共有する。
- 生徒の思考の流れに基づいた授業構成にする。

- 「できた」「やれた」が「わかる」につながる授業展開をすることで学習意欲を引き出す。
- どれくらいできればいいのかを生徒にも知らせる。
- 50分の授業で、生徒が英語を聞いたり読んだり書いたり話したりする時間を意識的に多く作り出す。
- 「この表現はこの場面で使える」と理解することが活用につながる。
- 身近な出来事（学校行事、学年行事、学級行事、地域の行事、ニュースなど）と関わる活用を考える。
- 授業と家庭学習との接続を工夫することで、家庭学習の成果が実感できる授業づくりをする。



### ○授業で、技能を図る多様なチャンスを作っていますか？

- 「言語についての知識」が身についたかどうかは主にペーパーテストなどで図ることが多いですが、「外国語表現の能力」や「外国語理解の能力」などを図るためには「スピーチテスト」「インタビューテスト」「リスニングテスト」「ダイアログテスト」「生徒の発表」「生徒の作品」などさまざまな活動を計画的に行うことが必要です。
- その際、なぜそのような活動をするのかといった目的と、どれくらいできたらいいかといった目標を生徒とともに確認することも必要です。

## (2) 活動のある授業

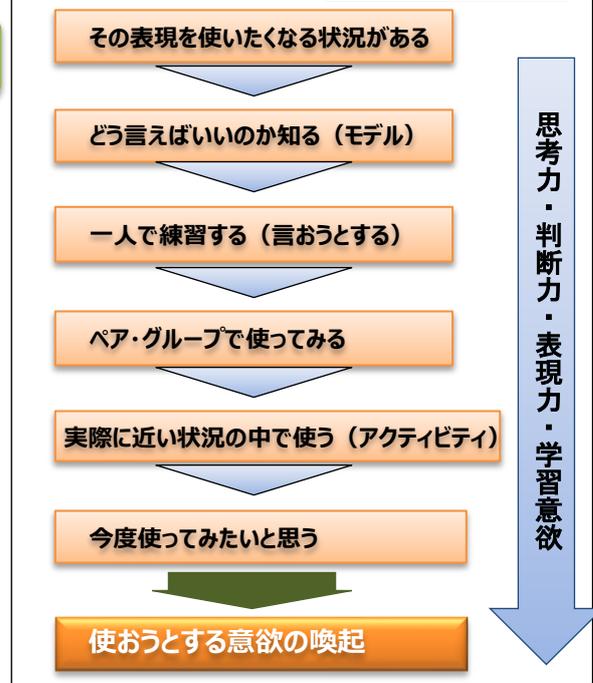
結び付ける

### ○説明は短く、シンプルに

- 丁寧に説明すれば、生徒はわかってくれるに違いないと思い、よりわかりやすくと思えば思うほど、日本語での説明が多くなってしまった経験はないですか。
- まずは教える側が、説明したいことを端的に整理し、詳しい説明をしなくてもいいような適切な例文や場面の提示が必要です。
- また教師が説明するのではなく、生徒が文法のルールに気づき、生徒自身がそれを説明するような時間をつくることで、他の生徒の理解が一段と深められることもあります。

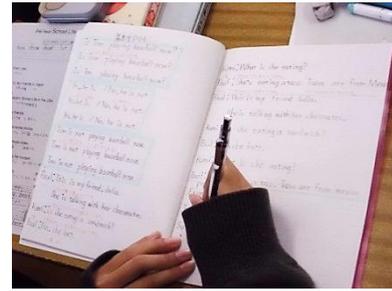
### 子どもの思考の流れにそって、

#### 学習過程を構成する



## ○自分の言葉で表現する場面設定

- コミュニケーションの充実を図るうえで大切なことは、生徒自らと授業内容とに、主体的なかかわりをもたせることです。絵、写真、映像など視聴覚教材の工夫や活用をすることで学習意欲を喚起したり、ペア練習やグループ活動など生徒同士を関わらせる活動を取り入れることや、実際に使用し、自分の考えや気持ちを伝え合うなどの活動において、生徒に英語を使わせながら学び取らせることが大切です。
- その際に、既習の知識、技能、経験をうまく取り入れ、生徒が自ら表現したくなる活動を仕組むことが大切です。そのためには表現の場の年間の見通しを立てることが必要です。『修学旅行』『宿泊学習』『職場体験』『体育祭』などの行事のあとは生徒にとっても「伝えたいことがある」はずで、生徒自身の言葉で書いたり話したりという表現活動のチャンスをつくりましょう。



## (3) 自分の時間のある授業

向き合う

### ○一人で練習する時間をつくる

- 語彙や教科書の音読の時に、一人で練習をする時間をつくるのが大切です。
- 音読指導にはさまざまな方法があり、生徒自らチャレンジしたくなるよう多様な音読を設定することも必要です。

### ○自己選択させる

- また「本文の中から、どれでもいいので覚えたい文を1文だけ選んで覚えましょう」と生徒に自己選択のチャンスを作ることが、学習意欲につながることもあります。
- 複数のワークシートを用意し選択させたり、「何問目までは全員でやる課題、何問目からは発展課題」と1枚のワークシート内での選択を工夫することも考えられます。

### ○発問を工夫し、考える場をつくる

- これから学習する教科書の題材は、生徒に何について考えさせるねらいがあるのかを深く読み解くことが大切です。その時に、答えが1つではない多様な考えがある発問をすることは、一人で考えることを促します。
- また考えを引き出すため、生徒自ら教科書の本文をもう1度読み直す必要に迫られる発問を工夫することが大切です。

## (4) ペア・グループでの学び合いのある授業

つなげる

### ○生徒同士を関わらせる活動を仕組む

- 一斉に声を合わせて語彙や英文を読む以外に、ペアの活動を取り入れることで相手を意識した目的のある音読になります。
- 問題演習後の答え合わせの時に、答え合わせだけでなく、



「この問題の中のどれか1つを覚えましょう」と選択させ、「覚えたかどうかペアの友だちに言ってみましょう」という活動を取り入れることで、「問題を解く活動」が「話す活動」、「聞く活動」へとつながります。

### ○お互いの学習成果を確認する

- 「読めなかった単語が読めた!」「つかえずに本文が読めた!」など1時間の中での自分の成長が自分でわかることが学習意欲につながります。ペアで確認させることで、お互いの進歩が確認され、励みとなります。
- また、ペア活動やグループ活動で、スモールステップのゴールを丁寧にみとることを取り入れることが大切です。

## (5) 振り返りの時間がある授業

振り返る

### ○授業のまとめの時間を保障する

- 授業をどう締めくくるとかは次時への学習への意欲にも大きな影響を与えます。一人一人のわかり方は異なるので、授業のまとめ方を工夫することが必要です。
- 1時間の学習で学んだことを自分の言葉で表出する時間をまとめとして位置付けることも大切です。
- また振り返りの交流は、友だちのわかり方を知り、自分と比較することにもなり、さらに学びが深まります。



### ○振り返りを授業改善に活かす

- 生徒自らがこの時間の目標に対して、達成度がどうであったのかを考えたり、教師にとっては今後の指導に生かすためにも振り返りは大切です。
- 「振り返りシート」等を活用し、その中に、定期的に生徒の声が聞けるよう、自由記載欄などの工夫をすることも大切です。

(参考) ワーキングで使用した「振り返りシート」

振り返りシート ( )月( )日( )曜日 ( )限  
( )年( )組( )番 名前( )

1. 今日のめあて

2. 今日のめあては達成できましたか

( ) ( ) ( ) ( )  
できた まあまあできた あまりできなかった できなかった

3. わかったこと、気がついたことを書きましょう

4. わからなかったこと、もっと知りたいことを書きましょう

## ◆ 「道徳の時間」の授業づくり

### 1. 授業づくりの方向性

道徳教育は、「道徳の時間」を“要”として学校の教育活動全体を通じて行うものです。つまり、「道徳の時間」は道徳教育における中核的な役割を担っています。



「道徳の時間」の授業づくりでは以下の3つの視点が大切になります。

#### ● 道徳的価値の理解を深める

道徳的価値の理解とは、

「ねらいとする道徳的価値が大切であること（**価値理解**）」

「大切ではあるが道徳的価値に根ざした行いは容易ではないこと（**人間理解**）」

「道徳的価値にかかわる感じ方・考え方は、人によって様々であること（**他者理解**）」を理解することです。これらの理解を深める学習を行うことが必要になります。

#### ● 子どもが自分とのかかわりで考える

子どもの主体的な学びとは、子どもがねらいとする道徳的価値に関わる事からなどについて、**自分との関わりを実感しながら学ぶ**ことです。授業の構想に当たっては、子どもが様々な問題を自分の事としてとらえ、自分の体験などにもとづいて考えられるようにすることが大切です。

#### ● ねらいとする道徳的価値を視点に自分自身を振り返る

自分自身を振り返る学習とは、子ども一人ひとりがねらいとする道徳的価値にかかわる行いや考え方、感じ方はどうであったかを、**具体的に振り返る**ことです。授業者は、ねらいに沿った振り返りをどのような視点でさせるのかを明らかにすることが大切です。

### 2. 「道徳の時間」の授業づくりのながれ

道徳の時間は、

- ① 「自分を見つめる」時間
- ② 「道徳的価値を自覚する」時間
- ③ 「主体的に道徳的実践力を身に付けていく」時間 です。



「道徳の時間」の授業づくりは、以下のような手順で進めることができます。

#### I ねらいを検討する

年間指導計画をもとに、ねらいを設定し、指導内容や教師の指導の意図を明らかにします。

#### ◎ なぜ、年間指導計画を作成するのでしょうか？

- ① 6年間を見通した計画的、発展的な指導ができます。
- ② 個々の学級での道徳の時間の授業のよりどころとなります。
- ③ 学級相互、学年相互の教師間の研修などの手掛かりとなります。

## II 指導の要点を明らかにする

ねらいに関する、“児童生徒の実態”“各教科、特別活動及び総合的な学習の時間における指導との関連”も考え、指導の要点を明らかにします。

## III 資料を吟味する

活用する資料について、“ねらいとの関わりで道徳的価値がどのように含まれているか”“児童生徒の実態に合っているか”などの観点から検討します。

## IV 児童生徒の感じ方、考え方を予測し、主な発問を考える

授業の中で最も深く考えさせる発問(中心的な発問)を考えます。

## V 学習指導過程(展開の概要)を考える

ねらい、児童生徒の実態、資料の内容などから、授業の流れの中心となる展開の段階について考え、児童生徒の道徳的価値の自覚を一層深めるためにはどのように指導したらよいか検討します。

## VI 板書計画を立てる

ねらいに関わって、指導の意図や資料の内容の整理、児童生徒の感じ方や考え方の整理を視覚的にするために、板書を有効に使うことを考え、計画を立てます。

### ◎板書計画を立てるときの point は？

- ・学習指導過程との関連をもたせて計画を立てることが大切です。(授業の流れが見える工夫)

時期	主題名 (内容項目)	資料名	ねらい	教科・領域との 関連
4月	1 あいさつ 2-(1)	「あいさつができた」	通学路で会うおばあさんにやっといさづきた主人公の姿を通して、進んであいさつをしようとする	生活指導の目標「気持ちを含めてあいさつをしよう」
	2 節度ある 生活 1-(1)	「節度ある生活」	主人公の姿を通して、節度ある生活をしようとする道徳的態度を育てる。	
	3 やくそく 1-(5)	「やくそくの本」	友達との約束かおばあちゃんとの食事かで悩む主人公を通して、約束は守らないといけないという道徳的価値を育てる。	

年間指導計画の例(道徳の時間の主題配列表)

平成21年度「魅力ある道徳の授業づくり」

大阪府教育センター より抜粋

### ◎読み物資料を分析するとき…

#### 資料の何を読むのでしょうか？

- ・主として主人公の**道徳的変化**を読みます。  
→道徳的意識や行為がどのように(どこで)変化したのかを読みます。

### ◎中心発問を考える際の Point は？

- ・中心発問は、**本時のねらいと一致**させることが重要です。
- ・予想される子どもの反応をできるだけ多く考えることが大切です。

※「道徳の時間」の学習指導過程については、

**3. 道徳教育における「大阪の授業スタンダード」**(58ページ)を参照。

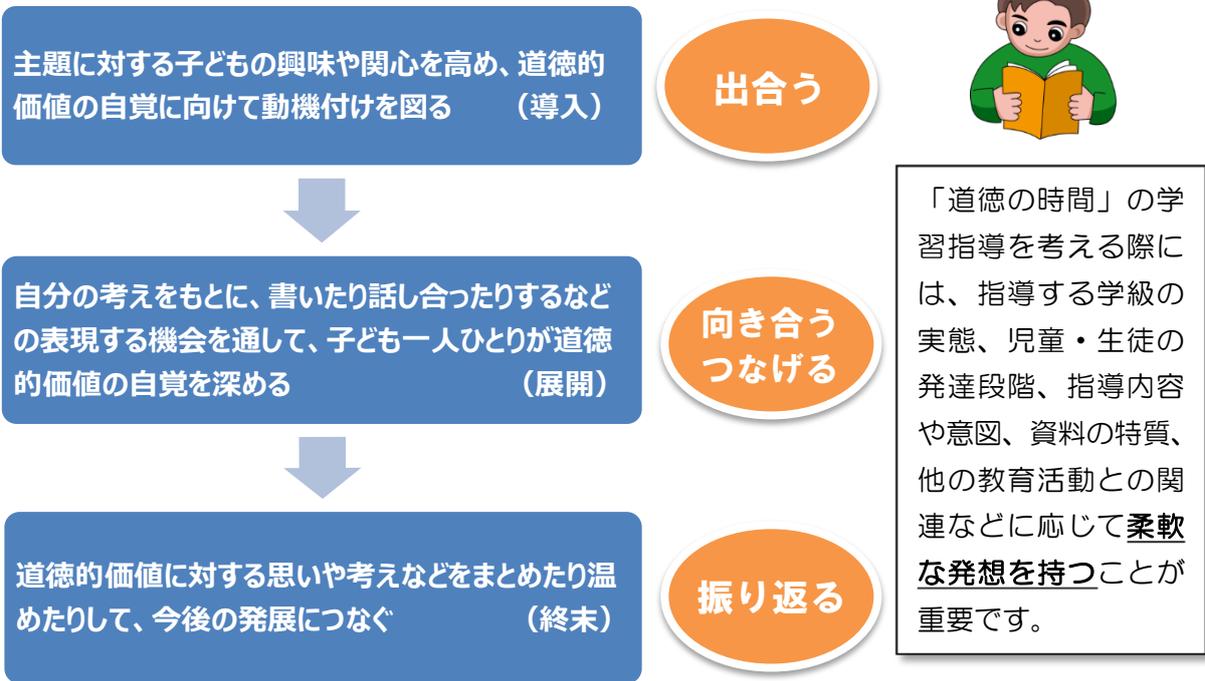


紙芝居や絵本を用いた指導法の工夫

(道徳教育ワーキング参加者による研究授業)

### 3. 道徳教育における「大阪の授業スタンダード」

「道徳の時間」の学習指導過程は、一般的には、導入・展開・終末の各段階を設定することが広く行われています。



※上記のような指導の展開を基本としますが、いたずらに固定化、形式化することなく、**弾力的に扱う**などの工夫をすることが大切です。



**弾力的な扱い**は、道徳の時間の特質をおさえることが大前提であり、奇をてらった展開をするためのものではありません。

### 4. 「道徳の時間」の指導方法の工夫

本時のねらい（道徳的実践力の育成）に向けて、1時間の授業で子どもが“どのような学習を行う必要があるか”“どのような姿を見せればよいか”を考え授業づくりを行う必要があります。そのために、指導方法を工夫することは重要なポイントです。

「道徳の時間」の指導方法の工夫として、以下のような取組が挙げられます。

- 指導過程の工夫
- 発問構成の工夫
- 劇的な表現(役割演技など)
- 資料の活用(読み物資料など)
- 資料提示の工夫(紙芝居、ペープサート、写真、ICT機器の活用など)
- 補助資料の提示
- 話し合いの時間の設定
- 人材の活用(家庭や地域の協力など)
- ワークシートの活用
- 座席配置の工夫
- など



話の流れを視覚的に表す  
資料提示の工夫

✓ 「**道徳の時間**」でなぜ資料を活用するのでしょうか？

資料には、児童生徒が人間としてのあり方や生き方などについて考えを深め、学び合う**共通の素材**としての役割があります。ねらいとする道徳的価値に関わる問題場面、状況が含まれている共通の素材として読み物資料などの資料を活用することは、「道徳の時間」の特質である集団思考を促すために効果的です。

各出版会社が発行している副読本のほか、以下の資料も活用できます。



5. 「**道徳の時間**」にかかわる授業研究の進め方

「道徳の時間」が目指すものは、子どもの将来に生きる内面的な資質であり、直近の子どもの行動に資することを目的とするものではありません。つまり、「道徳の時間」の指導は、子どもの変容を直接的に求めるものではないということを念頭に置き、研究授業や模擬授業、研究協議等を進めることが大切です。

研究授業等を参観する際には、**参観の視点をそろえ**、その後の研究協議の柱とすることが効果的です。「道徳の時間」の授業を考える視点として、①「資料について」②「ねらいは達成されたか」③「子どもの姿はどうであったか」などがあげられます。右のような参観シートを作成し記入したうえで研究協議を行えば協議の柱が明確になります。

道徳の時間の授業づくり 授業参観シート

( )月( )日( ) : ~ ( ) :

学年 ( ) - ( )

主題 ( ) - ( )

資料名 ( )

①資料について

②ねらいは達成されたか(中心発問など)

③子どもの姿(関わり合い)はどうであったか

道徳教育ワーキングで使用した参観シート

「**道徳の時間**」の授業づくりチェックシート

◎発問は本時のねらいと一致していますか？

⇒本時のねらいからずれることがないように、子どもたちの意識の流れを予想し、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問などを心掛けることが大切です。

◎子どもの発言は、教師との1対1のやり取りになっていませんか？

⇒子どもたちの発言をつなぐとともに、発言をさらに深める問いかけをすることで、考えや思いを深めていくことが大切です。

◎教師の思いや考えの一方向的押し付けになっていませんか？

⇒「道徳の時間」は、将来出会うであろう様々な場面で主体的に道徳的な行為ができるようにするための時間です。『これがいい』『わるい』ではなく『どうしていくのか』を考える時間です。



大阪府

大阪府教育センター 平成 25 年 3 月発行

〒558-0011 大阪市住吉区菟田 4 丁目 13 番 23 号 / 電話 06 (6692) 1882

URL <http://www.osaka-c.ed.jp>